

ビシャコ谷遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集

1984

津山市・津山市教育委員会

序

津山市は岡山県北の山間盆地に位置します。近年の各種開発事業には目を見張るものがありこの津山の地にもその波が押し寄せて来ています。開発は平野部を避け、主に丘陵地帯に集中する傾向があります。当然、丘陵部は遺跡の立地する密度が高く、文化財保護行政を進めていく上で支障をきたすことがままあります。

ここに報告するビシャコ谷遺跡もその一例であります。津山市が農林業同和対策事業の一環として計画した、い草乾燥施設建設場所は当初遺跡は確認されていなかったのであります。工事実施にあたり、津山市教育委員会の現地踏査を行った際、初めて遺跡の所在が確認されたのであります。このため、津山市教育委員会としても発掘調査体制を緊急に整え、工事に先立ち発掘調査を実施したのであります。

ここに、関係各位の御協力により無事調査を終えることができましたので、調査の成果を報告いたします。各位の御活用をいただければ幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書作成にあたり御協力いただいた関係者に対し、厚く御礼申し上げます。次第であります。

昭和59年3月31日

津山市教育委員会

教育長 福島祐一

例言

1. 本書は津山市教育委員会が実施した農林業同和対策事業の一環としての共同作業所（大型い草乾燥施設）建設に伴うビシャコ谷遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査は津山市教育委員会社会教育課主事行田裕美が担当し、昭和58年4月18日から6月30日まで実施した。
1. 遺構の実測には光延稲造、村瀬 隆、飯田和江の協力を得た。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は磁北である。
1. 本書第4図に使用した「ビシャコ谷遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山東部）を複製したものである。
1. 鉄滓の分析は新日本製鉄大澤正己氏に依頼し、「ビシャコ谷遺跡出土鉄滓及び鉄斧の金属学的調査」を寄稿していただいた。記して謝意を表します。
1. 出土遺物の整理作業は現在継続中であり、とくに土器の復元についてはまだ大半が残っている。
1. 出土遺物・図面は津山市二宮埋蔵文化財整理事務所に保管している。
1. 本書の執筆と編集は行田が担当したが、遺物のトレースと原稿浄書には飯田の協力を得た。

本文目次

I. 立地と周辺の遺跡	
1. 遺跡の立地	1
2. ビシャコ谷遺跡と周辺の遺跡	1
II. 調査の経過	
1. 調査に至る経過	3
2. 調査体制	6
3. 調査経過	6
III. 調査の記録	
1. 弥生時代	8
2. 古墳時代	26
3. 奈良時代	31
4. その他の遺構と遺物	34
IV. まとめ	
1. 各遺構の時期について	36
2. 段状施設について	37
3. 段状遺構について	37
4. 鉄斧について	37
5. 5号長方形住居状遺構の築造について	38
6. 長方形住居状遺構について	38
(付) ビシャコ谷遺跡出土鉄滓及び鉄斧の金属学的調査(大澤正己)	41

挿図目次

第1図	ビシャコ谷遺跡位置図	1
第2図	ビシャコ谷遺跡周辺地形図 (S=1:3000)	2
第3図	ビシャコ谷遺跡と周辺主要遺跡分布図 (S=1:50000)	3
第4図	ビシャコ谷遺跡地形測量図及びグリッド配置図 (S=1:1000)	5
第5図	ビシャコ谷遺跡遺構配置図 (S=1:300)	7
第6図	1号住居址平面・断面図 (S=1:80)	8
第7図	1号住居址出土土器 (S=1:4)	9
第8図	1号住居址出土石器 (S=1:2)	9
第9図	2号住居址平面・断面図 (S=1:80)	10
第10図	2号住居址出土鉄器 (S=1:2)	10

第11図	3号住居址平面・断面図 (S=1:80)	11
第12図	3号住居址出土土器 (S=1:4)	11
第13図	4号住居址平面・断面図 (S=1:80)	12
第14図	4号住居址出土土器 (S=1:4)	12
第15図	4号住居址出土土器 (S=1:4)	12
第16図	5号長方形住居状遺構 (S=1:80)	12
第17図	5号長方形住居状遺構遺物出土状態 (S=1:20)	14
第18図	5号長方形住居状遺構出土土器 (1) (S=1:6)	15
第19図	5号長方形住居状遺構出土土器 (2) (S=1:6)	16
第20図	5号長方形住居状遺構出土土器 (3) (S=1:6)	17
第21図	5号長方形住居状遺構出土土器 (4) (S=1:6)	18
第22図	5号長方形住居状遺構出土土器 (5) (S=1:6)	19
第23図	5号長方形住居状遺構出土土器 (6) (S=1:4)	20
第24図	5号長方形住居状遺構出土土器 (S=1:2)	21
第25図	6号住居址平面・断面図 (S=1:80)	22
第26図	6号住居址出土土器 (S=1:4)	23
第27図	7号住居址平面・断面図 (S=1:80)	24
第28図	7号住居址出土土器 (S=1:4)	25
第29図	7号住居址出土土器 (S=1:2)	25
第30図	段状遺構平面・断面図 (S=1:80)	25
第31図	段状遺構出土土器 (S=1:4)	25
第32図	ビシャコ谷1号墳平面・断面図 (S=1:100)	26
第33図	ビシャコ谷1号墳石室平面・断面図 (S=1:40)	27
第34図	ビシャコ谷1号墳遺物出土状態 (S=1:20)	28
第35図	ビシャコ谷1号墳出土須恵器 (S=1:3)	29
第36図	ビシャコ谷1号墳出土鉄器 (S=1:2)	30
第37図	不明遺構平面・断面図 (S=1:80)	30
第38図	不明遺構出土須恵器 (S=1:3)	31
第39図	不明遺構出土土師器 (S=1:4)	31
第40図	1号建物址平面・断面図 (S=1:80)	31
第41図	2号建物址平面・断面図 (S=1:80)	32
第42図	2号建物址関連遺物 (S=1:3)	33
第43図	溝状遺構平面・断面図 (S=1:80)	33

第44図	溝状遺構出土須恵器 (S=1:3)	34
第45図	溝状遺構出土土師器 (S=1:4)	34
第46図	1号柱穴列平面・断面図 (S=1:80)	34
第47図	2号・3号柱穴列平面・断面図 (S=1:80)	35
第48図	ピット群出土須恵器 (S=1:3)	35

図 版 目 次

図版 1—1.	遺跡遠景 (西から)	図版 3—5.	2号・3号柱穴列
2.	遺跡遠景 (東から)	6.	遺跡西半全景 (東から)
3.	1号住居址 (東から)	7.	遺跡東半全景 (西から)
4.	2号住居址 (東から)	図版 4.	5号長方形住居状遺構床面出土土器(1)
5.	3号住居址 (南から)	図版 5.	5号長方形住居状遺構床面出土土器(2)
6.	3号住居址炭化材出土状態 (南から)	図版 6.	出土石器・鉄器及び鉄滓
7.	3号住居址炭化材出土状態 (東から)	1—5.	5号長方形住居状遺構床面
図版 2—1.	4号住居址 (東から)	6.	4号住居址埋土
2.	5号長方形住居状遺構6号住居址 (東から)	7.	1号住居址埋土
3.	5号長方形住居状遺構遺物出土状態。6号住居址 (東から)	8.	7号住居址埋土
4.	5号長方形住居状遺構遺物出土状態 (東から)	9.	2号住居址埋土
5.	5号長方形住居状遺構遺物出土状態 (南から)	10.	ビシャコ谷1号墳石室床面
6.	6号・7号住居址 (東から)	11.	ビシャコ谷1号墳周溝埋土
7.	ビシャコ谷1号墳 (南から)	12.	1号建物址柱穴埋土
8.	ビシャコ谷1号墳遺物出土状態 (南から)	13.	ビシャコ谷1号墳石室床面
図版 3—1.	1号建物址, 1号柱穴列 (南から)	14.	2号建物址造成面埋土
2.	2号建物址 (南から)	15.	不明遺構埋土
3.	不明遺構 (東から)	16.	2号建物址柱穴埋土
4.	溝状遺構 (西から)	17.	溝状遺構埋土

(付)大澤論文図版目次

図版 1.	ビシャコ谷遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織 (1)
図版 2.	ビシャコ谷遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織 (2)
図版 3.	鉄斧中の非金属介在物の走査X線像 (×1500)

鉄斧中の非金属介在物のエネルギー分散型X線による分析結果

I 立地と周辺の遺跡

1 遺跡の立地 (第2・4図, 図版1-1・2)

ビシャコ谷遺跡は津山市下高倉西1,570番地に所在する。津山市街地から県道大森～停車場線を北上すると津山盆地の北端を東西に走る広域営農道に出る。広域営農道は中国山地から南に樹枝状に派生した低丘陵を切断したかたちで建設されており、道路の両サイドにはあちこちに丘陵のカッティングが露呈している。この交差点から農道を東に約1km程進むと、最初の丘陵カッティングに出くわす。遺跡はちょうどこの丘陵の先端部に位置する。遺跡から眼下南を見下すと、谷の奥深くまで谷水田が開拓され、谷水田はやがて高野平野へとひらけている。また、北に目をやると、中国山地の分水嶺線が延々と連なっている。

遺跡の立地するこの丘陵は平野部との比高差約20mを測り、丘陵面自体さほど広い平坦面を持たず、どちらかと言えばやせ尾根に近い丘陵である。

2 ビシャコ谷遺跡と周辺の遺跡 (第3図)

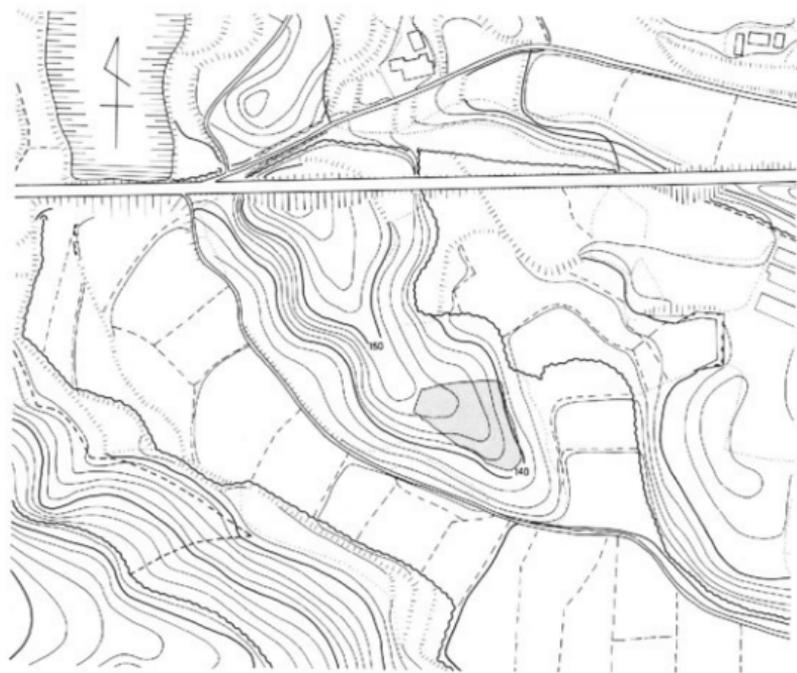
遺跡の所在する高倉地区周辺はきわめて遺跡の希薄な地域である。津山市内における遺跡の立地状況は、津山盆地を中心にした地域で、中国山地から樹枝状に派生した丘陵上、あるいは丘陵間に形成されたやや幅広い平野部に集中する傾向がある。それも、盆地中心からさほど距離を隔てない地域に限定されるようである。従って、中心部から奥地へ入るほど遺跡が限少するということが指摘される。ビシャコ谷遺跡もこのような希薄な地域の1遺跡であると考えることができよう。

津山市内における弥生時代の中心的役割を果たした地域はやはり宮川流域である。流域に営まれた数多くの遺跡はこのことを如実に物語っていると云えよう。

弥生時代前期・中期前半の遺物を出土する遺跡としては、一丁田遺跡・天神原遺跡・京免遺跡・高橋谷遺跡などがあげ



第1図 ビシャコ谷遺跡位置図



第2図 ビシャコ谷遺跡周辺地形図 (S=1:3,000)

られる。いずれも遺物だけの出土であり、生活痕跡としての遺構は確認されておらず、その社会的様相は今だ明らかでない。中期中葉頃から沼E遺跡・竹ノ下遺跡などで遺構の存在が確認されるようになり、中期後半にいたり沼遺跡・野介代遺跡・押入西遺跡・西吉田遺跡など遺跡数はピークに達する。後期の遺跡には京免遺跡・竹ノ下遺跡などのように中期から継続して営まれている遺跡と、逆に大田十二社遺跡・天神原遺跡などのように後期になってから新しく営まれた遺跡とに二分され、後者が多数を占める。

津山市内における古墳時代集落遺跡の調査は現代までのところほとんど行われておらず、弥生時代の遺跡に重複するかたちで4本柱方形プランの住居址、あるいは2間×2間・2間×3間の掘立柱建物が1軒ないし2軒程度散見される状況である。

その後、奈良時代にいたり、美作国府、美作国分寺、国分尼寺はいずれも津山市内に設置される。この時期における集落もやはり古墳時代のそれとほぼ同様の在り方を示し、2間×3間程度の掘立柱建物が数棟認められるにすぎない。他に寺院跡としては夜半鹿寺が、また、古瓦を出土する遺跡としては津山市椿高下、同二宮大成などがあげられる。

参考までに周辺の主要遺跡の一覧表を付している。参照されたい。



- | | | | | | |
|----|---------|----|--------|----|---------|
| 1 | ビシャコ谷遺跡 | 11 | 野介代遺跡 | 21 | 畝山古墳群 |
| 2 | 高橋谷遺跡 | 12 | 押入西遺跡 | 22 | 天王山古墳 |
| 3 | 一丁田遺跡 | 13 | 狐塚遺跡 | 23 | 和田古墳 |
| 4 | 大田十二社遺跡 | 14 | 天神原遺跡 | 24 | 坂塚古墳 |
| 5 | 京免遺跡 | 15 | 西吉田遺跡 | 25 | 狐塚古墳群 |
| 6 | 竹ノ下遺跡 | 16 | 沼古墳群 | 26 | 三毛ヶ池古墳群 |
| 7 | 沼遺跡 | 17 | 正仙塚古墳 | 27 | 車塚古墳群 |
| 8 | 沼E遺跡 | 18 | 玉林大塚古墳 | 28 | 長畝山古墳群 |
| 9 | 観山遺跡 | 19 | 六ノ塚古墳群 | 29 | 美作国分尼寺跡 |
| 10 | 地京遺跡 | 20 | 能満寺古墳群 | 30 | 美作国分寺跡 |

第3図 ビシャコ谷遺跡と周辺主要遺跡分布図 (S=1:50,000)

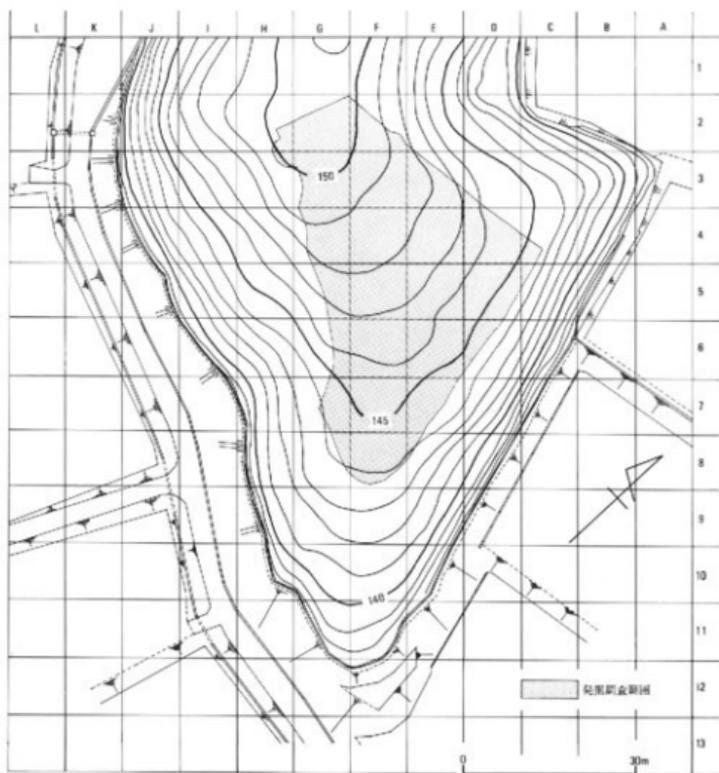
II 調査の経過

1 調査に至る経過

津山市は地域特産物として、北部地区を中心にい草栽培を奨励し振興を図っている。従来、い草の乾燥処理については、天日乾燥方式を採用して処理していたが、盛夏時の天候に左右さ

第3図 ビシャコ谷遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

遺跡番号	遺跡名	参考文献
1	ビシャコ谷遺跡	本書
2	高橋谷遺跡	1977～78年にかけて津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未刊
3	一丁田遺跡	近藤義郎・榎井莊介「山北一丁田遺跡」『津山弥生住居址群の研究』津山市・津山郷土館1957年
4	大田十二社遺跡	河本 清・中山俊紀・安川豊史・行田裕美「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会1981年
5	京免遺跡	中山俊紀・河本 清「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会1982年
6	竹ノ下遺跡	＊
7	沼遺跡	近藤義郎・渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究』津山市・津山郷土館1957年
8	沼E遺跡	河本 清・柳瀬昭彦「沼E遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告9』岡山県教育委員会1978年 中山俊紀・行田裕美「沼E遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集』津山市教育委員会1981年
9	観山遺跡	淡 哲夫「八出現山遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3集』津山市教育委員会1977年
10	地家遺跡	淡 哲夫「野介代地家遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4集』津山市教育委員会・道路改良工事新幹線構入線文化財発掘調査委員会1977年
11	野介代遺跡	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973年
12	押入西遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973年 淡 哲夫・安川豊史・行田裕美「押入西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第14集』津山市教育委員会1983年
13	狐塚遺跡	河本 清「狐塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集』津山市教育委員会1974年
14	大神原遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・柳瀬昭彦「大神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会1975年
15	西吉田遺跡	1982年津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未刊
16	沼古墳群	今井 堯・渡辺健治・神塚英郎・河本 清「美作津山市沼6号墳調査報告」『津山郷土館報第1集』津山郷土館1968年 今井 堯・渡辺健治・神塚英郎・河本 清「美作津山市沼6号墳調査報告」『古代古墳第6集』1969年 伊藤 晃・井上 弘「沼古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会1975年
17	正仙塚古墳	淡 哲夫「高野山西正仙塚古墳」『津山市文化財報告Ⅰ』津山市教育委員会1975年 「高野山西正仙塚古墳」『津山の文化財』津山市教育委員会1983年
18	玉淋大塚古墳	今井 堯「津山市川崎玉淋大塚調査報告」『津山市文化財調査略報第1集』津山市教育委員会1960年
19	六ツ塚古墳群	今井 堯「六ツ塚古墳群調査略報」『津山市文化財調査略報3』津山市教育委員会1962年 「六ツ塚古墳群」『津山市文化財調査略報No.4』津山市教育委員会 今井 堯「六ツ塚1号墳調査略報」『津山市文化財調査略報7』津山市教育委員会1966年 近藤義郎「岡山県津山市六ツ塚古墳群」『日本考古学年報15』日本考古学協会1967年
20	能満寺古墳群	今井 堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1巻』津山市1972年
21	欽山古墳群	「日土欽山古墳群」『津山市文化財調査略報No.4』津山市教育委員会 今井 堯・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本4 中国・四国』角川書店1970年 「日土大玉山古墳と欽山古墳群」『津山の文化財』津山市教育委員会1983年
22	大玉山古墳	＊
23	和田古墳	行田裕美「日上和田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集』津山市教育委員会1981年
24	飯塚古墳	「區分寺飯塚古墳」『津山の文化財』津山市教育委員会1983年
25	狐塚古墳群	今井 堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1巻』津山市1972年
26	三毛ヶ池古墳群	＊
27	車塚古墳群	「井口車塚古墳」『津山の文化財』津山市教育委員会1983年
28	長嶽山古墳群	河本 清「美作考古学の現状と課題」『古代古墳第7集』1971年 今井 堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1巻』津山市1972年
29	美作國分寺跡	淡 哲夫「美作國分寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集』津山市教育委員会1983年
30	美作國分寺跡	淡 哲夫・安川豊史・行田裕美「美作國分寺跡発掘調査報告」津山市教育委員会1980年



第4図 ビシャコ谷遺跡地形測量図及びグリッド配置図 (S=1:1,000)

れ品質、出荷量にも影響がでていた。このため、かねてより生産者から機械乾燥処理方式の導入要望があり、この要望に基づき市としては農林業同対策事業の一環として共同作業所（大型草乾燥施設）を津山市下高倉西地区に建設するのはこびとなった。

当初、この地域は遺跡分布範囲からはずれており、事業主体者である津山市も遺跡は無いものと判断して事業計画を立案していた。ところが、実施にあたり宅造法に基づく合議が津山市教育委員会に提出され、現地踏査を行った際、古墳の石室に使用されたと考えられる石材が散乱しており、遺跡であることが確認されたのである。このため、津山市は昭和57年度着工を延期し、次年度に繰り越し埋蔵文化財発掘調査終了後着工するという結論に達したのである。これを受け、津山市教育委員会としても昭和58年度開始当初から発掘調査に入れる体制づくりをし、昭和58年4月18日から発掘調査を実施するのはこびとなった。

2 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記の通りである。

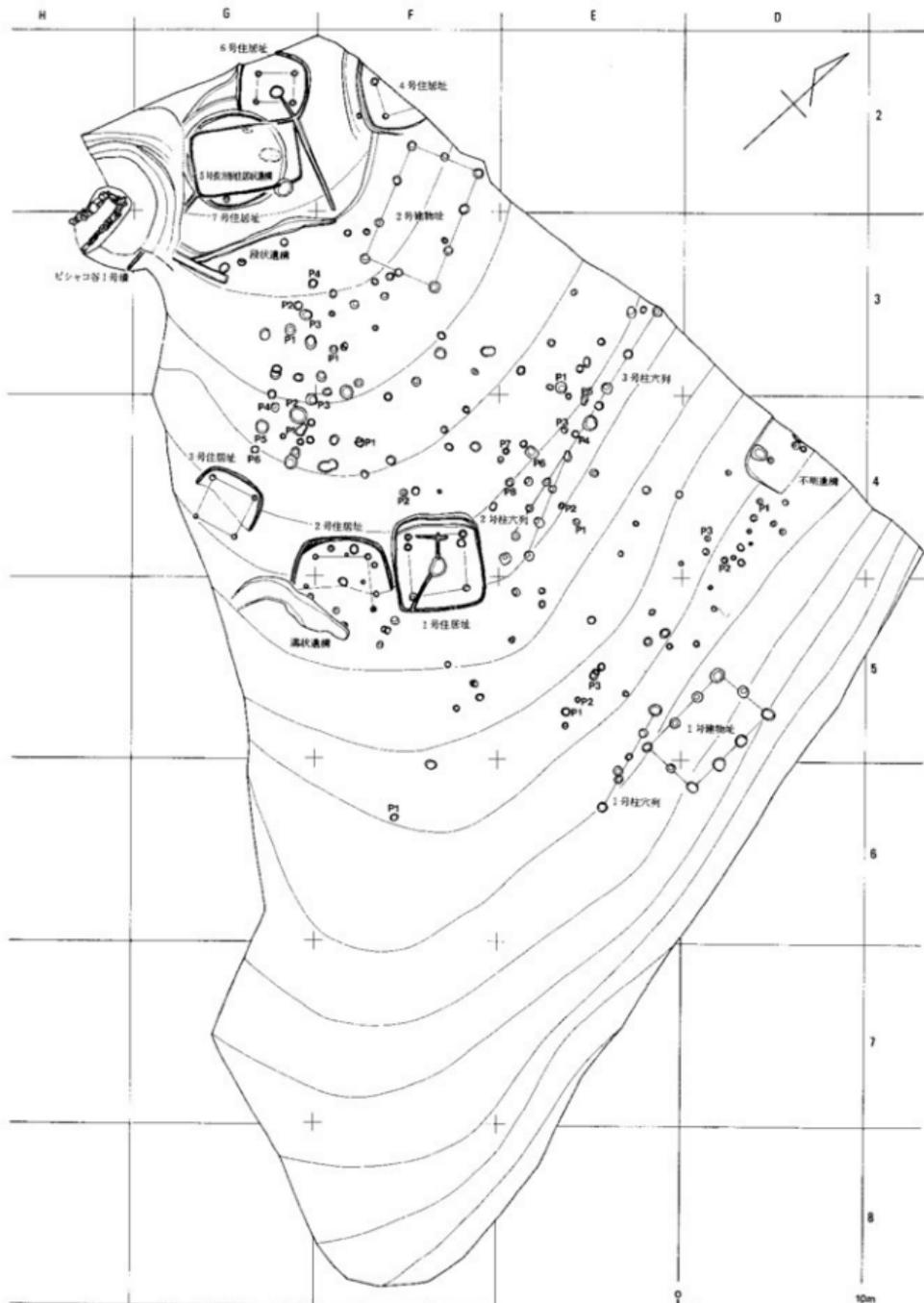
発掘調査主体	津山市教育委員会	教育長	福島祐一
		教育次長	山本繁雄
事務担当		参事兼社会教育課長	須江尚志
		文化係長	森元弘之
		囑託	杉山紀子
調査担当		主事	行田裕美
調査協力者	池島糸子・池島絹子・池島君江・池島すみ代・池島藤市・池島ときの・池島良市・谷口綾子・谷口いつ子・谷口岸三・谷口末男・谷口虎雄		

なお、発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の御協力、御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

飯田和江・大澤正己・大平 茂・国貞圭也・小谷善守・斉藤純子・三枝健二・菅ひとみ・高畑知功・中山俊紀・春名啓介・日笠月子・前原策馬・光延稲造・湊 哲夫・村瀬 隆・安川豊史・米井からえ

3 調査経過

発掘調査は1983年4月18日より開始し、6月30日までを費した。調査区域内の表土剥ぎは事前にユンボを借り上げ終了させておいたので、調査は直接遺構検出作業から入ることができた。遺構の検出と併行して、グリッドのクイ打ちを実施した。グリッドは地形測量用基準グイを基準に10mグリッドを設定した。調査は南側斜面から着手し、除々に頂部へと進んでいく方法をとった。従って、遺構番号も調査順に下方から付していった。1号・2号住居址は地山の土色と埋土の土色が非常に類似しており、そのプランを確認するのに、手間取った。5号長方形住居状遺構からは多量の土器が出土し、掘り下げ、実測にかなりの時間を割かれ、着手から、終了まで約1ヶ月程を費やした。これは全調査期間の約半分近くを消化したことになる。全期間を通じ比較的天候に恵まれ、調査も順調に進行することができた。この間、6月1日・3日・18日には清泉小学校の郷土クラブ、高倉小学校の高学年、大篠地区の文化財愛護少年団の案内をすると共に、6月14日には地元の現地説明会を開催している。7月1日には発掘調査器材の搬出を終え、7月2日より二宮埋蔵文化財整理事務所にて報告書作成事業にとりかかった。



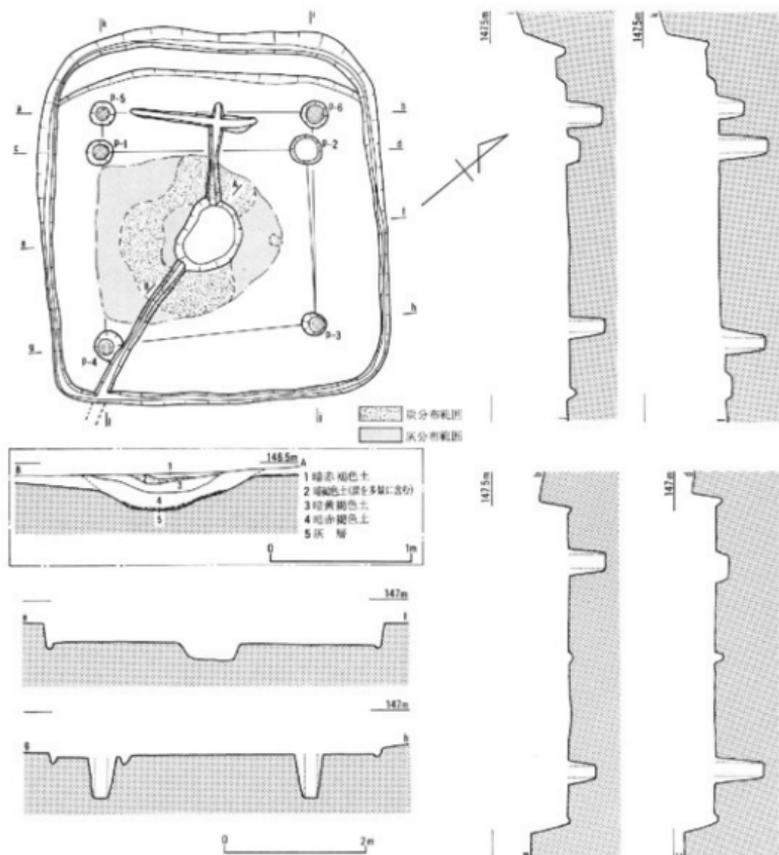
第5図 ビシャコ谷遺跡遺構配置図 (S=1:300)

Ⅲ 調査の記録

1. 弥生時代

1号住居址 (第6図, 図版1-3)

調査区のほぼ中央に位置する。谷側は壁が残存せず、壁溝だけである。一度山側に拡張を行っており、2時期の柱穴・壁を有する。最初の住居址は床面径約4.5mを測る隅丸方形プランを呈する4本柱住居である。床面の中央部には不整形形の中央穴が位置する。深さは20cmを測る。中央穴の周辺には炭・灰の分布が認められた。中央穴からはP-1とP-2のほぼ中間方向に

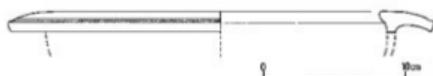


第6図 1号住居址平面・断面図(S-1:80)

幅約15cm、深さ約10cmを測る床溝が検出された。この溝はやがてP-5とP-6方向に走る溝と交差する。またP-4方向へむけて同様の溝が検出された。壁溝までは確認されたが、住居外へ延びるか否かは、壁が存在せず不明である。柱穴は、P-1・P-2・P-3は径、深さともほぼ同一の規模をもつものであるが、P-2は非常に浅く、柱穴の可能性は少ないかも知れない。しかしながら柱穴配置状況から判断し、P-2を応柱穴と理解しておきたい。壁溝は3辺には認められるが、P-1～P-2の辺には認められない。住居の拡張は山側方向約40cmの距離に壁面を新設することにより行われている。他の3辺は旧住居のそれを踏襲している。この拡張に伴いP-5・P-6も新設されている。これに対応する柱穴はP-3・P-4で旧住居のものを再使用している。床面は旧住居の床面を約10cmの厚さで埋め、新たに形成している。中央穴の断面図をみるとこのことがよく観察される。中央穴の底面には灰層が薄く堆積していた。旧住居の床面を埋め新たに住居を拡張するという例は極めて珍しい例である。

出土土器 (第7図)

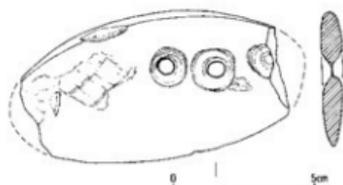
1号住居址から出土した遺物は数点の土器片だけであり、いずれも埋土中の出土である。図示できるものは高杯形土器口縁部の1点だけである。口縁端部が大きく外方へ張り出し楕形の杯部をもつ器形である。色調は赤褐色を呈し胎土は砂質に富む。



第7図 1号住居址出土土器 (S=1:4)

出土土器 (第8図、図版6-7)

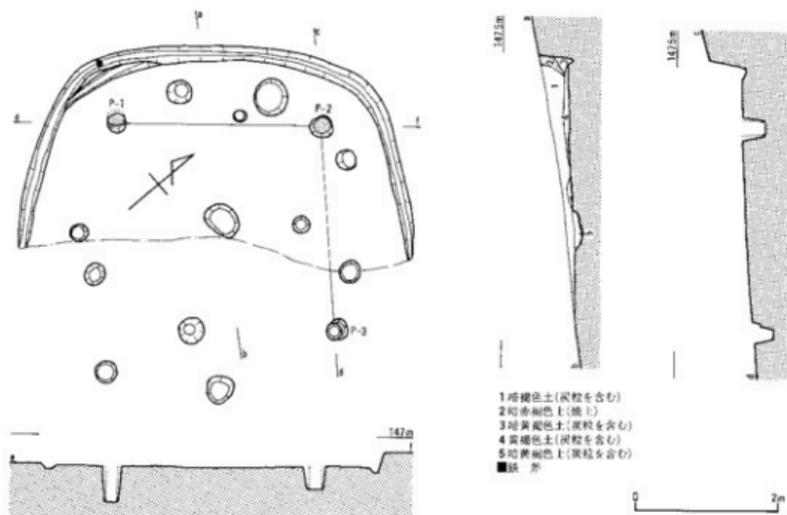
P-6埋土中より出土した。白雲母石英片岩製の磨製石庖丁である。研磨は全面には及ばず表裏両面共部分的に剥離痕を残す。紐孔は2孔あり、穿孔は表裏両面から行っている。この結果中央部には稜を形成する。図面右端には穿孔途中の凹みが表裏両面に認められる。



第8図 1号住居址出土土器 (S=1:2)

2号住居址 (第9図、図版1-4)

1号住居址の西側に隣接して位置する。谷側は削平を受けており、残存部は山側半分だけである。床面中央部には不整形の浅い中央穴が位置する。中央穴底面には薄く灰層が堆積している。柱穴と考えられるピットはP-1・P-2・P-3である。他にピットが多数検出されたが住居址に伴うものではないと考えられる。P-1コーナー壁だけがわずかに拡張されており壁溝が重複している。拡張は全周には及ばない。削平部を復元すると、4本柱の径約5.5mを測る円形プランの住居と考えられる。なお、床溝は検出されなかった。遺物としては鉄斧1点と、土器片数点が出土した。いずれも埋土中の出土である。



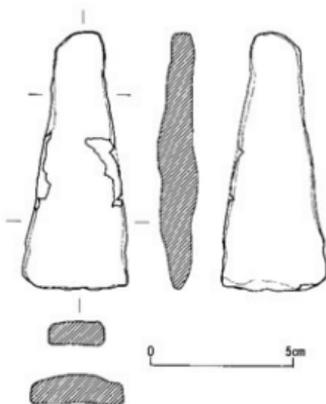
第9図 2号住居址平面・断面図(S=1:80)

出土鉄器(第10図、図版6-9)

最大長9.0cm、最大幅3.7cm、最大厚1.4cmを測る鉄斧である。発掘時一部を破損したが、完形品である。床面より13cm浮いた状態で出土した。

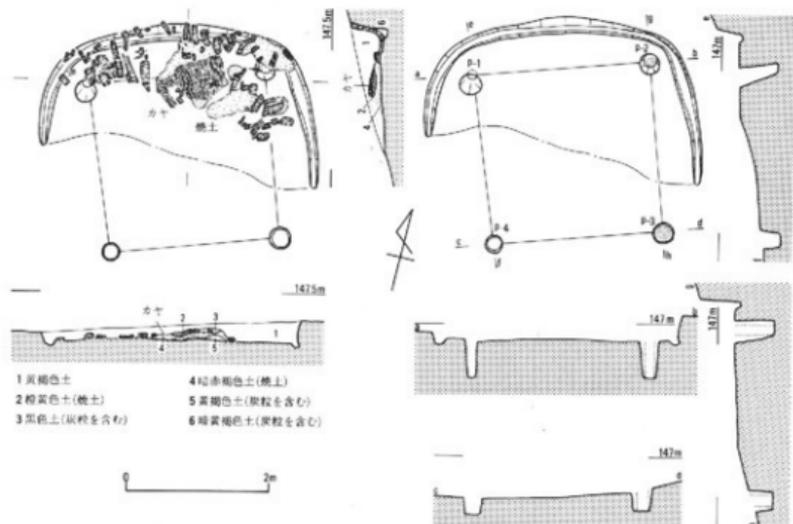
3号住居址(第11図、図版1-5~7)

2号住居址の西側斜面部に位置する隅丸方形プラン4本柱住居である。残存部は山側部分だけであり、谷側半分は流失している。本住居は火災住居であり、多量の垂木と考えられる炭化材、炭化したカヤ、焼土塊が出土した。炭化材には丸太のもの、半截したもの、4分割したものなどが認められる。壁周辺の炭



第10図 2号住居址出土鉄器(S=1:2)

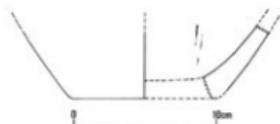
化材はいずれも壁面に密着しており住居内に焼け落ちた状態がうかがえる。同時にこのことは垂木が壁外方に位置していたことを物語るものである。炭化したカヤの出土した部分の断面を観察すると、カヤの下に垂木が位置し、さらにその下に焼土が位置していることが理解される。柱穴底面のレベルはほぼ同一のレベルであるが、P-2~P-4の柱穴はほぼ垂直に立てられているが、P-1だけは斜め方向に検出されており、上屋の構造に疑問をいだかせる。遺物としては数点の土器片が埋土中より出土した。



第11図 3号住居址平面・断面図 (S=1:80)

出土土器 (第12図)

図示できるものは1点だけである。壺形土器の底部破片である。遺存状態極めて悪く、調整は不明である。



第12図 3号住居址出土土器 (S=1:4)

4号住居址 (第13図, 図版2-1)

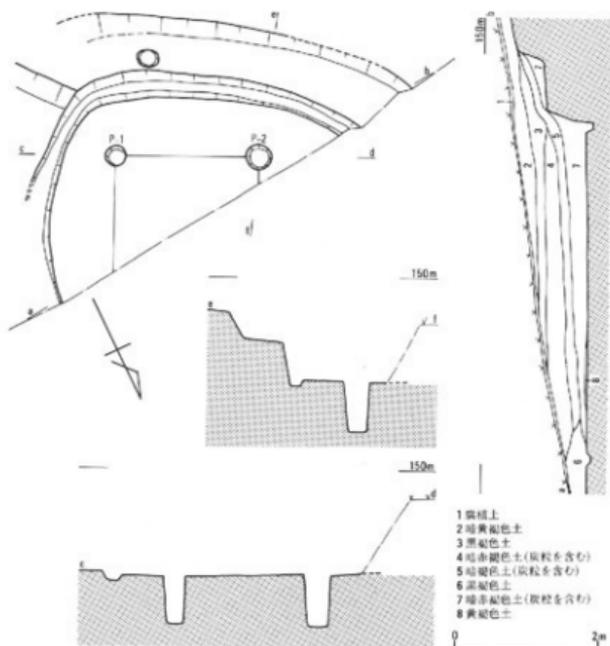
調査区の北端に位置する。住居の北側半分は調査区外にあたるため未調査である。このため全容は明らかではないが、径約4.5mを測る隅丸方形プラン4本柱住居と推定される。柱穴は共に深くP-1は65cm、P-2は70cmを測る。住居の山側には幅約50cmの平坦面をもつ段状施設がめぐり、この段状施設はどの住居にも付設されていたものと考えられ壁の高さが約50cm以上残存しているものについてのみ認められる。遺物としては埋土中より砥石1点と数点の土器片が出土した。

出土土器 (第14図)

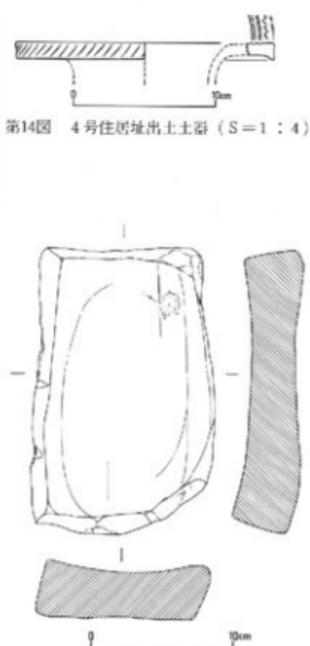
図示できるものは壺形土器口縁部の1点だけである。上面には2条の凹線文と波状文がめぐらされ端面には斜方向の連続刻み目文が施されている。

出土石器 (第15図, 図版6-6)

偏平礫を素材とした砂岩製の砥石である。長さ20cm、幅12.4cmを測る。表裏両面とも非常によく使用されており大きく凹んでいる。熱を受けた痕跡があり赤変している。



第13図 4号住居址平面・断面図 (S=1:80)

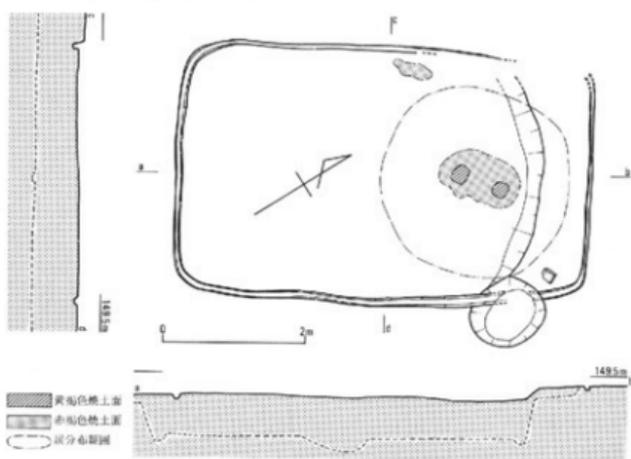


第14図 4号住居址出土土器 (S=1:4)

第15図 4号住居址出土石器 (S=1:4)

5号長方形住居状遺構 (第16図, 図版2-2)

4号住居址の南に位置する長辺5.85m、短辺3.2mを測る隅丸長方形プランの遺構である。ちょうど7号住居址の上に規格性をもって築かれたかのようにある。すなわち南辺コーナーは



第16図 5号長方形住居状遺構 (S=1:80)

円形プランの7号住居址の円周と合致し、また両長辺は円周より内側に同等の距離を置いて設定されているのである。床面の周囲には幅の狭い浅い溝がめぐる。竪穴の壁は西長辺だけにわずかに認められた。床面には北短辺側に円弧を描くように段が認められた。この段は7号住居址の円形の掘形と重なる。段の下中央部には長径1.2m、短径0.7mを測る楕円形の赤褐色焼土面が位置する。焼土面の両端には非常によく焼けた黄褐色の焼土面が2ヶ所認められた。この焼土面を中心に径約2.5mを測る円形の範囲に炭の分布が認められた。他に西長辺側にも赤褐色の焼土面が位置する。

遺物出土状態 (第17図, 図版2-3~5)

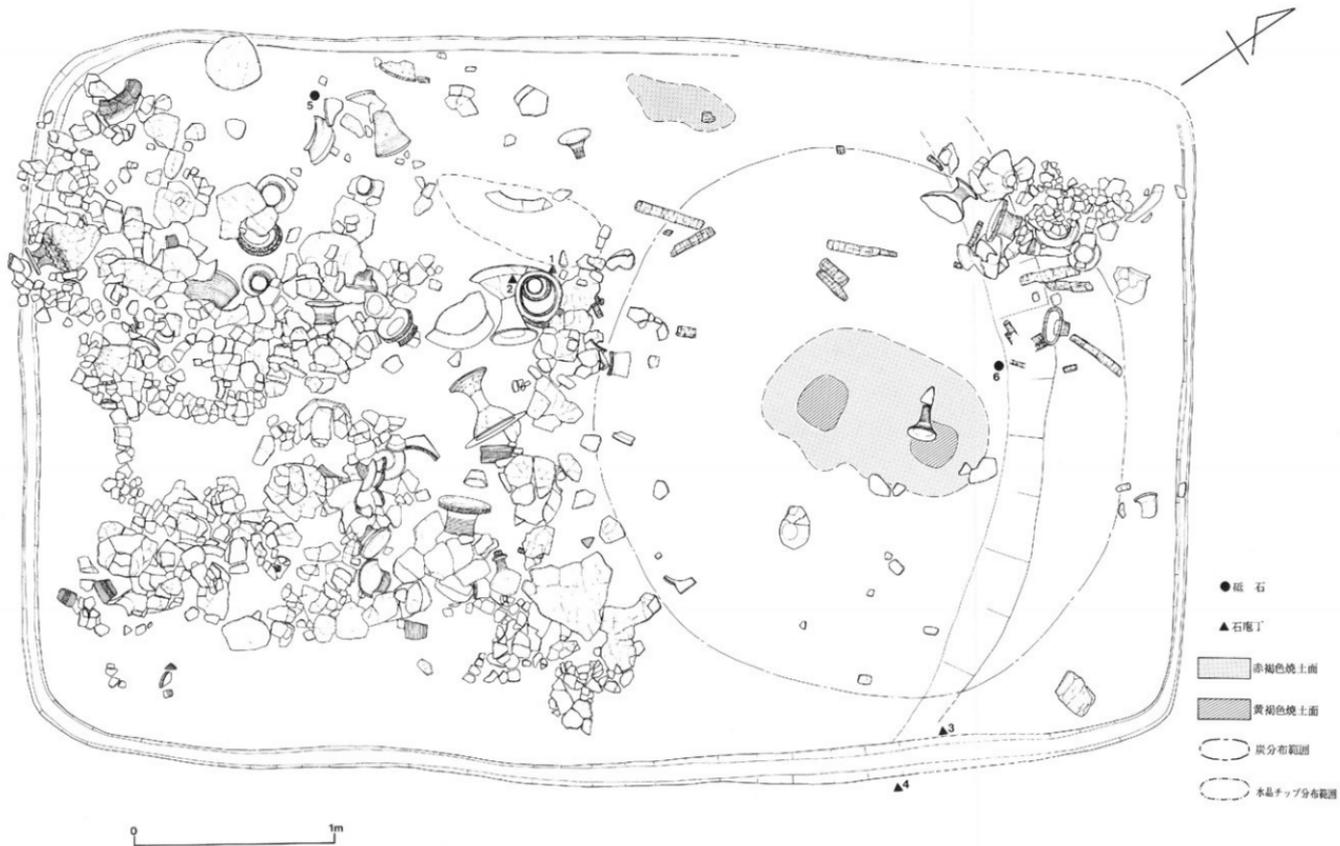
遺物の出土状態は第17図の通りである。北東コーナー部に数個体の土器が出土しているが、ほとんどは南半に集中している。土器の出土していない空白部は焼土面を中心とした炭分布範囲である。炭分布範囲の中には炭化材が含まれる。南半部には土器がびっしり出土しており、足の踏み場もない。これらはいずれも埋土中のものではなく、すべて床面から出土している。また廃棄されたような状態ではなく、完形品が並べて置かれてあったのが押しつぶされたような状態で出土している。遺物集中部東側及び南側は溝との間に空白部が認められるが、これは斜面下方側に位置するため削平を受けたものである。石器としては石庵丁の未製品と考えられるものと砥石がそれぞれ2点ずつ出土した。石庵丁の未製品と考えられる石器は両者とも2個体に分割されており、共に接合する。床面中央部に位置する高杯形土器の西側において約1.8m×0.6mを測る楕円形の範囲より水晶のチップが多数出土した。また、炭分布範囲の中からは径約1cm程の球形の炭化した植物の種子数点が出土した。

出土土器 (第18~23図, 図版4・5)

土器は現在整理途中であり、復元が完了したものはわずかで、図示したものだけである。従って、正確な土器の個体数は把握できない。このため口縁部の個体別分類によって総個体数を算出すると67個体になる。内訳は壺形土器44、甕形土器13、高杯形土器5、器台形土器1、鉢形土器2、蓋形土器2である。これらの中には明らかに口縁を欠損した壺形土器、杯部を欠損した高杯形土器も認められること、あるいは斜面下方側に削平を受けていることなど合わせ考えるとこの数値は若干の変動が予測される。

壺形土器 (1~14, 16~18, 26・27)

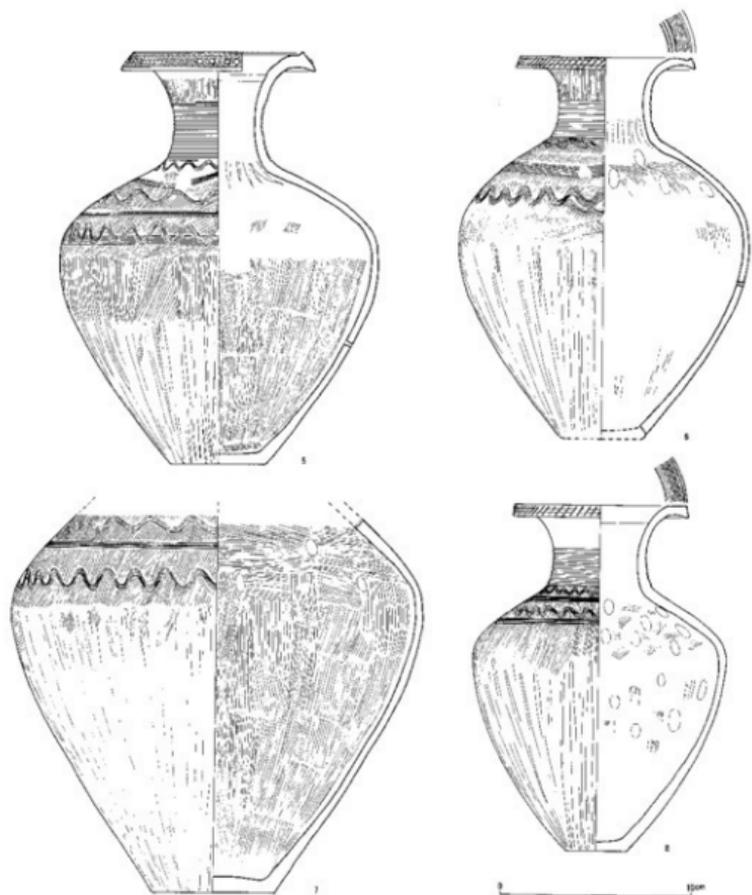
壺形土器は器形、大きさともにバラエティに富む。頸部の施文によって分類すると凹線文をもつもの(1~8)、凹線文をもたずに指による連続刺突文をめぐらすもの(10~14)、両者の併存するもの(9)、無文のもの4種に分けられる。それぞれの個体数は凹線文をもつもの31個体、連続刺突文をめぐらすもの5個体、両者の併存するもの、無文のものそれぞれ1個体ずつである。2を除き凹線文をもつ1群の土器には頸部から肩部にかけて楕円波状文、楕円直線文がほぼ交互にめぐるのに対し刺突文のめぐる1群の土器には楕円文は全く認められ



第17図 5分長方形住居状遺構遺物出土牡態 (S=1:20)



第18图 5号长方形侈口状遗构出土器(1) (S=1:6)



第19図 5号長方形往屈状遺構出土土器(2) (S=1:6)

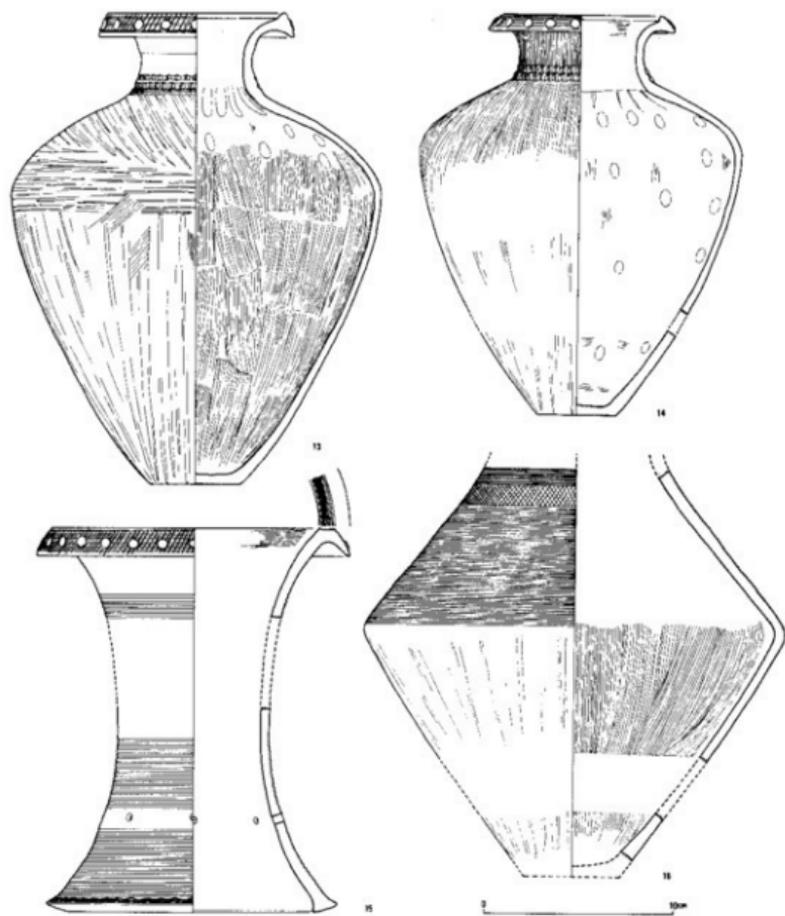
ない。2は波状文と直線文の代わりにヘラ描きによる斜格子文と凹線文が用いられている唯一の例である。次に、口縁部に目をむけると刺突文土器群は全て口縁部端面に円形浮文が施されるのに対し、凹線文土器群には円形浮文の加飾されるものとされないものの2種が認められる。また刺突文土器群の口縁部は水平に外方に張り出すものではなく、端面は内傾し、上下に拡張する。従って水平面、内面に櫛描波状文をもつものはない。これに対し、凹線文土器群には櫛描波状文あるいは円形浮文をもつものともたないものの2種がある。その比率はほぼ半々であり1点の例外(3)を除き、口縁端面が内傾し、水平面をもたないものには櫛描波状文は認めら



第20図 5号長方形住居状遺構出土土器(3) (S=1:6)

れず、口縁上端が水平に外方へ張り出し端面がほぼ垂直に立つものには波状文あるいは凹形浮文が加飾される。4は櫛描波状文の他に2本の貼り付け突帯が一部を除きめぐらされている。2本の突帯の端部は内側と外側が接合し丸くおさまられている。

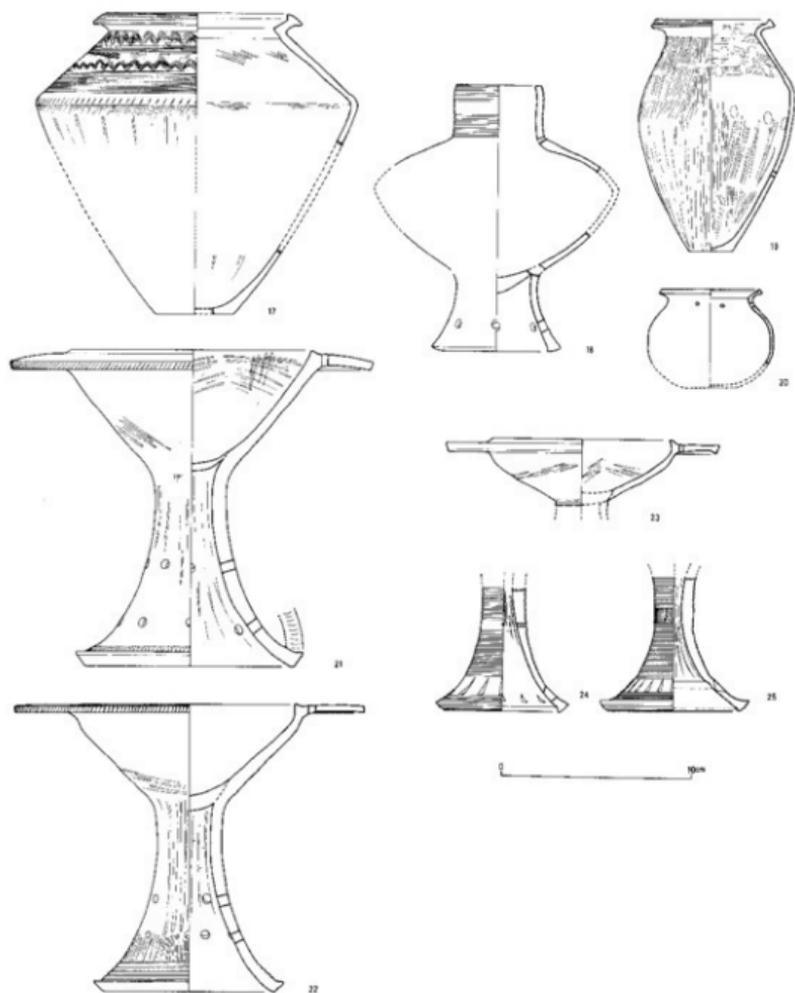
外面は原則として胴下半が縦方向のヘラ磨き、頸部から肩部にかけては横方向のハケ目仕上



第21図 5号長方形住礎状遺構出土土器(4) (S=1:6)

げであり、ハケ目をヘラ磨きが切っている。内面はハケ目、あるいはナデ仕上げである。

他に壺形土器としては、胴部がそろばん玉状に強く張りだし、頸部から胴部にかけて凹線文とヘラ描き斜格子文で飾られたもの(16)、あるいは櫛櫛波状文、直線文を施しその下位に凹線文、刻み目文をめぐらせたもの(17)もある。さらに、16の器形は1個体であるが、17の器形は他に波状文、直線文の代わりにヘラ描きによる斜格子目文を施したものが1点認められこれを加えると2個体である。特殊な器形として、台付壺(18・27)、直口壺(26)がある。18は遺存状態が極めて悪く、器壁が剥落している。このため調整は不明確であるが、頸部から胴



第22図 5号長方形住基状遺構出土土器(5) (S=1:6)

部にかけても凹線文が施されているものと考えられる。

甕形土器 (19)

図示したものは1点だけであるが、総数13個体である。大型のもの1点、中型のもの3点、小型のもの9点である。

高杯形土器 (21~25)

図示したものが全てである。21・22はともに完形品である。口縁部は水平に外方へ大きく張り出し、端面には刻み目文が連続してめぐる。杯部は内外面とも平面形が正方形状にヘラ磨きが施されている。22の口縁部には黒色を呈す部分の破片が接合している。これは、この破片だけ火を焚いたと考えられる炭の分布している場所から出土したためである。23は脚部、24・25は杯部を欠く。これらはいずれも他に同一個体の破片をもたない。このことから最初から欠損した状態で持ち込まれているのである。

器台形土器 (15)

図示した1点だけである。火を受けたためか赤変しておりボロボロである。この器台形土器は1点ではなくもう少し含まれているのではないかと、かなり注意して捜したが、他には認められなかった。

鉢形土器 (20)

非常に小型のもので薄手に作られている。頸部下位に円孔をもつ。口縁部だけでは甕形土器と区別がつきにくい、非常に類似した口縁部がもう1点あることから、他にあと1個体あるものと考えられる。

蓋形土器

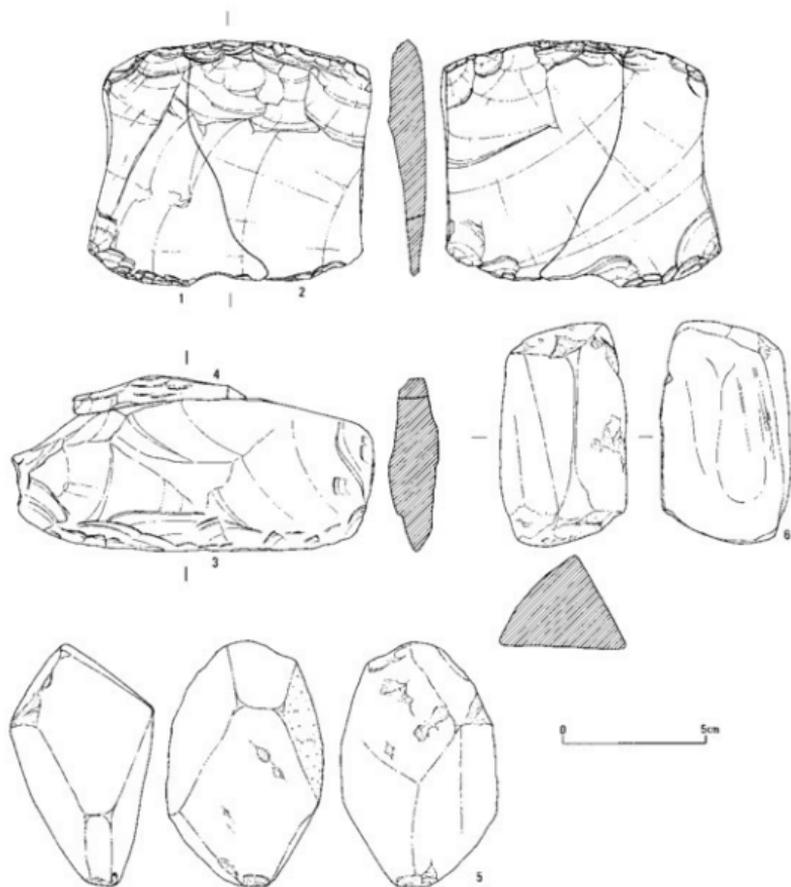
図示していないが円柱状のつまみをもつものであり2個体確認している。

出土石器 (第24図, 図版6-1~5)

1と2は約20cmの距離を隔てて出土した。サヌカイト製である。両端を欠くが他にサヌカイトの破片がないことからこの状態で持ち込まれたものと考えられる。上下両端から表裏両面ともに剝離が施されているが、刃部の形成までにはいたっていない。石庵丁の未製品と考えたい。3と4は約30cmの距離をおいて出土した。4は溝の外方より出土したが、動いたものと考えられる。緑色片岩製である。やはりサヌカイト同様他に破片は出土しなかったことからこのままの状態を持ち込まれたものである。石庵丁未製品と考えられる。5・6は砥石である。いずれも自然礫をそのまま使用している。5は炭分布範囲より出土したため部分的に黒変している。砂岩製と考えられる。6は火を受けたため赤変してもろくなっている。凝灰岩製と考えられる。



第23図 5号長方形住硯状遺構出土土器 (6)
(S=1:4)



第24図 5号長方形住居状遺構出土石器 (S=1:2)
 (番号は第17図出土位置番号と同一である)

6号住居址 (第25図, 図版2-6)

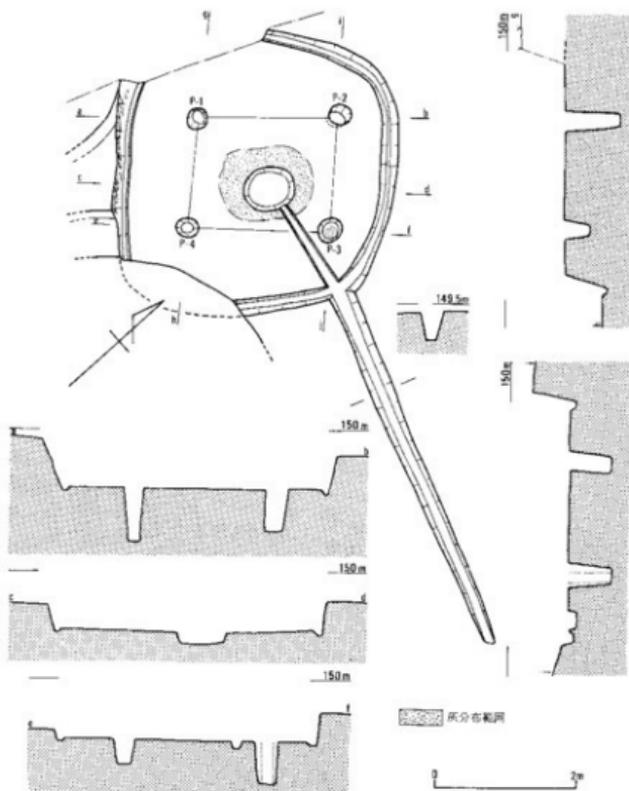
4号住居址の南に位置する4本柱隅丸方形プランの住居である。住居の西端は調査区域外のため未調査である。また南端コーナー部は7号住居址に切られている。床面の中央部には円形の中央穴が位置し、底面には薄く灰層が堆積していた。中央穴の周囲には灰が分布している。柱穴はこの中央穴を囲むように各コーナーに配されている。P-1はかなり深く約80cmを測る。中央穴からP-3方向へかけて床溝が走り、壁溝をへて住居外方へと長く延びている。P-1

～P-4側の壁面には上位部分だけに炭化したカヤが付着し、壁自体も赤変している。このことは住居がある程度埋没した後火を焚いたという事実を物語るものである。遺物としては埋土中より土器片若干量が出土しただけである。

出土土器（第

26図）

図示できるものは2点だけである。1は壺形土器口縁部である。ほぼ垂直に立つ頸部から口縁部は水平に外方に張り出す。水平面には2条の凹線文と波状文がめぐる。端部は垂直に上下に拡張し、端面には3条の凹線文が施されている。頸部には凹線文をめぐらせ凹線文の上位には縦方向のハケ目が観察される。



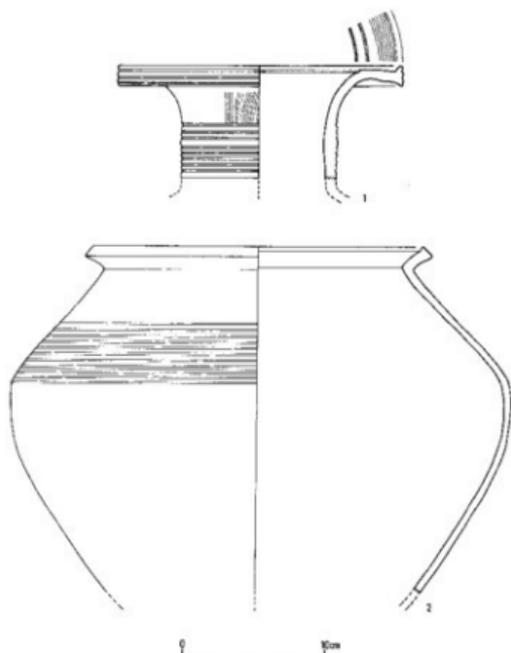
第25図 6号住居址平面・断面図(S=1:80)

この個体は大・小2ヶの破片の接合よりなるが、大きい方の破片は6号住居址埋土中の出土であり、小さい方の破片は4号住居址埋土中の出土である。2は「く」の字状の口縁部から肩部が強く張り出す器形の壺形土器である。遺存状態が極めて悪くわずかに肩部に凹線文が観察されるだけである。

7号住居址（第27図、図版2-6）

5号長方形住居状遺構の真下に位置する。径約5mを測る5本柱円形プランの住居である。4号住居址同様幅約50cmの平坦面をもつ段状施設が住居北半分に認められる。床面から平坦面

までの高さは約55cmを測る。床面の中央部には楕円形の浅い中央穴が位置する。中央穴壁面には灰層が付着していた。中央穴からは3方向に壁溝まで床溝が延びている。P-3・P-4間の床溝は作り変えられている。すなわち、最初のもは壁溝までで、住居外へは出ないのに対して、新しい方の溝は壁を切り込み住居外方へと長く延びている。押入西遺跡では住居との取り付き部が暗渠になっている例が認められたが、本住居例は開渠である。この床溝の新設に伴ない柱穴もP-3からP-6へと作り変えられている。中央穴の周辺には灰層の薄い堆積が認められた。P-4側の壁に沿っ



第26図 6号住居址出土土器 (S=1:4)

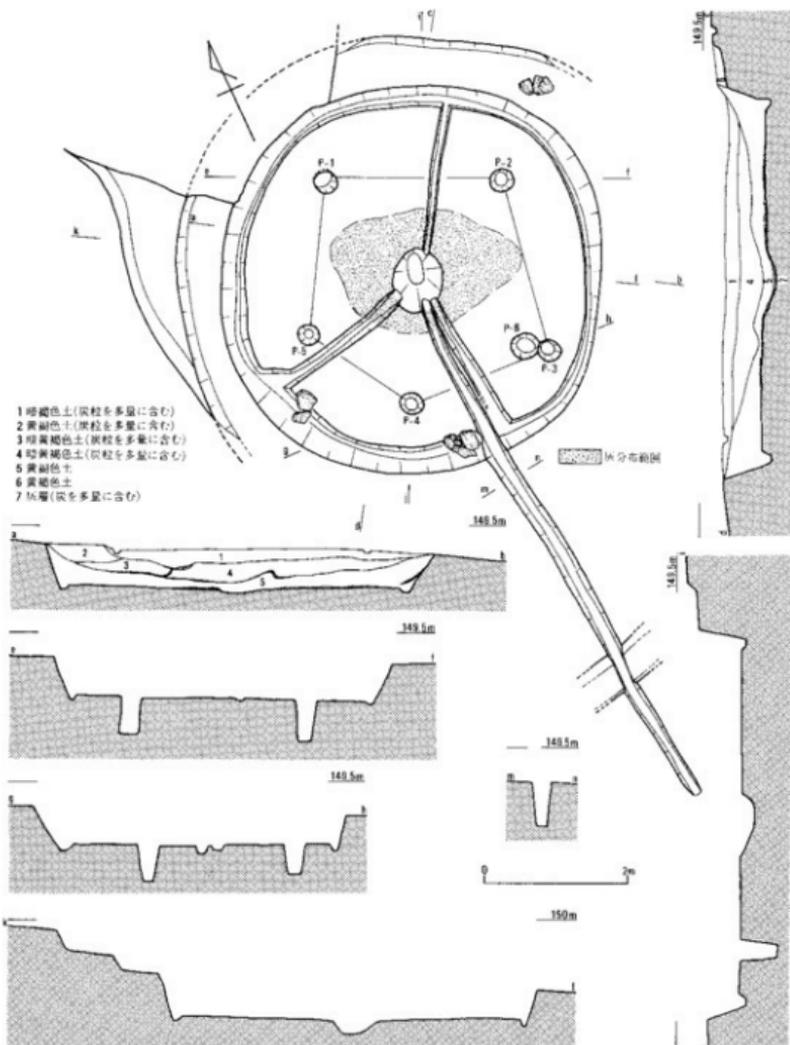
て、掌大から人頭大の緑色片岩を数個ずつおいた個所が2ヶ所認められた。これらはいずれも床面から約20cm程浮いた状態である。また、P-2方向の段状施設平坦面にも同様の状態が認められるのである。P-1方向には検出されなかったが、これらの配石の位置はちょうど5号長方形住居状遺構の各コーナー部に合致する。遺物としては土器片少量と石庵丁、柱状片刃石斧各1点が出土した。他に炭化したモモの種子1点も出土している。いずれも埋土中の出土である。

出土土器 (第28図)

いずれも遺存状態が悪く、器壁は剥落している。1は壺形土器底部である。外面は縦方向のヘラ磨き、内面は縦方向のハケ目が観察される。3は高杯形土器脚部中位である。外面には凹線文がめぐる。内面にはしぼり痕跡が認められる。

出土土器 (第29図、図版6-8)

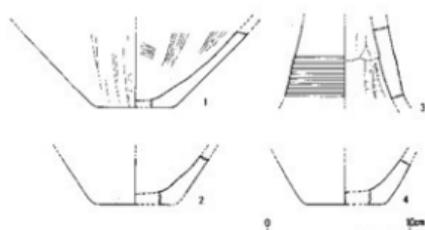
1は白雲母石英片岩製石庵丁である。表裏両面とも研磨が及んでいるが、剥離痕が部分的に残る。穿孔は表裏両面から行われ中央部に穢を形成する。2は段状施設埋土中より出土した緑色片岩製柱状片刃石斧である。頭部を欠く。刃部はていねいな研磨により仕上げられている。最大幅2.4cm、最大厚2.6cmを測る。



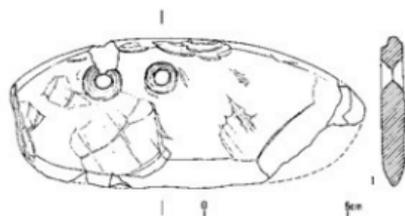
第27図 7号住居址平面・断面図(S=1:80)

段状遺構 (第30図, 図版2-6)

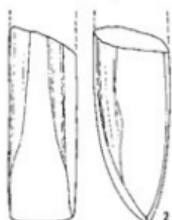
5号長方形住居状遺構、6号、7号住居址を取りまくように等高線走向に沿って位置する。丘陵斜面を断面「L」字状に削平し、平坦面を形成する。壁に沿って幅約30cmを測る浅い溝が



第28図 7号住居址出土土器 (S=1:4)

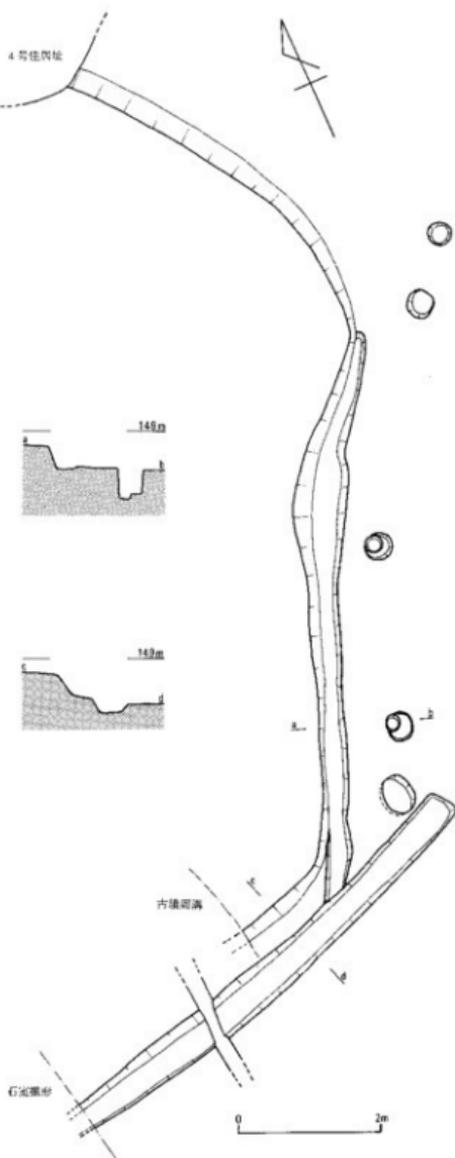


第29図 7号住居址出土石器 (S=1:2)



第31図 段状遺構出土土器 (S=1:4)

位置する。南側には東西方向に幅約40cm、深さ約10cmを測る溝が検出された。新旧関係で言えば、後者の方が古い。平坦面には柱穴と考えられるビットがいくつか存在するが建物址にはならなかった。北側に位置する溝をもたない平坦面は2号建物址に伴う造成面である。



第32図 段状遺構平面・断面図 (S=1:80)

出土土器 (第31図)

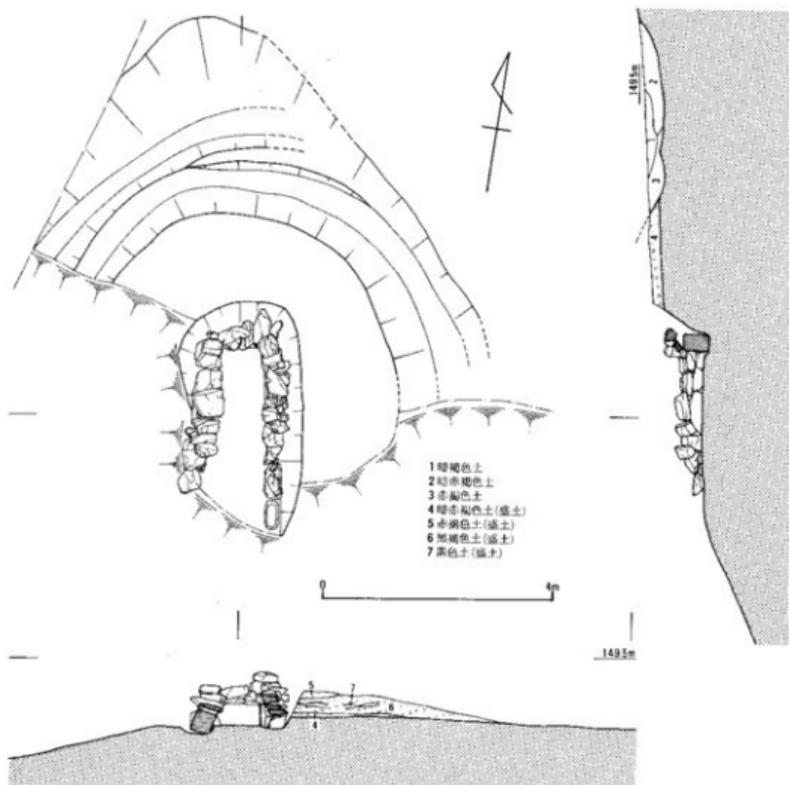
いずれも埋土中の出土である。1は高杯形土器口縁部である。口縁上端は内側に水平に張り出し、外面には1条の凹線文をもつ。いずれも遺存状態が極めて悪い。

2. 古墳時代

ビシャコ谷1号墳 (第32図, 図版2-7・8)

調査前の状況

本遺跡の立地する丘陵先端部に2~3ヶ所古墳と考えられる高まりが認められた。古墳の可能性もあるので、命名にあたり本古墳を1号墳とした。調査区南西端に位置する。南半は大きく削平を受けており、石室の石材が散乱していた。一見して古墳とわかる状況である。墳丘の高まりはほとんど認められず、平坦な地形を呈していた。



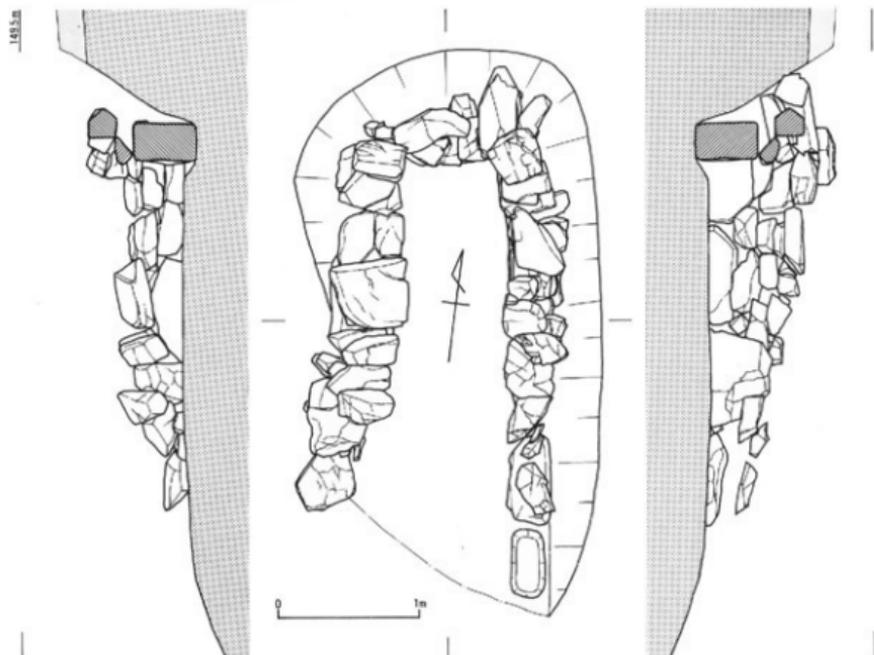
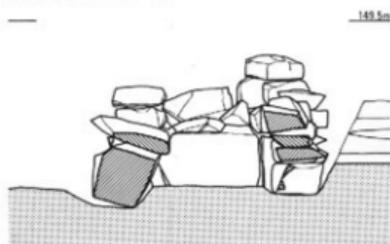
第32図 ビシャコ谷1号墳平面・断面図(S=1:100)

墳丘

復元径約7mを測る円墳である。北側周溝底と盛土残存部との比高差は約30cmを測る。表土を除去すると直接石室の石材がのぞいていた。古墳築造前の地山面は弥生期に造成を受けており、自然地形とは異なる。丘陵斜面に立地するため北側は盛土が薄く、南に行くにしたがって盛土の堆積が厚くなっている。墳丘の中央部には横穴式石室が位置する。

周溝

南半は削平を受けており残存しない。このため北半にだけ幅約1.1m、深さ約25cmを測る浅い周溝が半円状にめぐる。北西部には溝が2本重複した状態が認められる。内側の溝が古墳に伴う周溝と考えられ、外側の溝はこれを切って作られたものである。埋土中からは鉄滓5点と土師器、須恵器、弥生土器片が少量出土した。



第33図 ビシャコ谷1号墳石室平面、断面図 (S=1:40)

埋葬施設 (第33・34図)

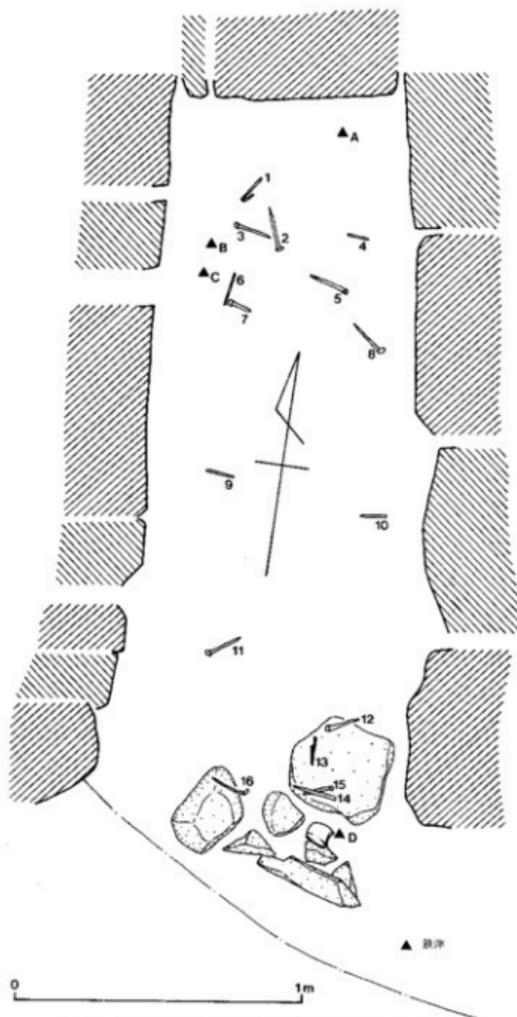
横穴式石室を内部主体にもつ。底面幅約 1.8mの掘形を掘り込み、石室を構築している。石室両側壁最下段には比較的大きな石を並べ、2段目からは不規則に積み重ねている。奥壁最下段には1枚石を使用している。西壁は中央にかなり張り出しているが、これは持ち送りになっているのではなく、倒れかかっているのである。南端を欠くが無袖式の横穴式石室と考えられる。床面幅は約90cmを測る。奥壁から床面残存部の長さは中央部で約3mを測る。床面南端には石が数個検出された。鉄釘、刀子はこの石の上のっていることから棺台として使用された可能性も考えられる。床面には鉄釘が出土したことから木棺が埋葬されていたものと考えられる。

出土遺物

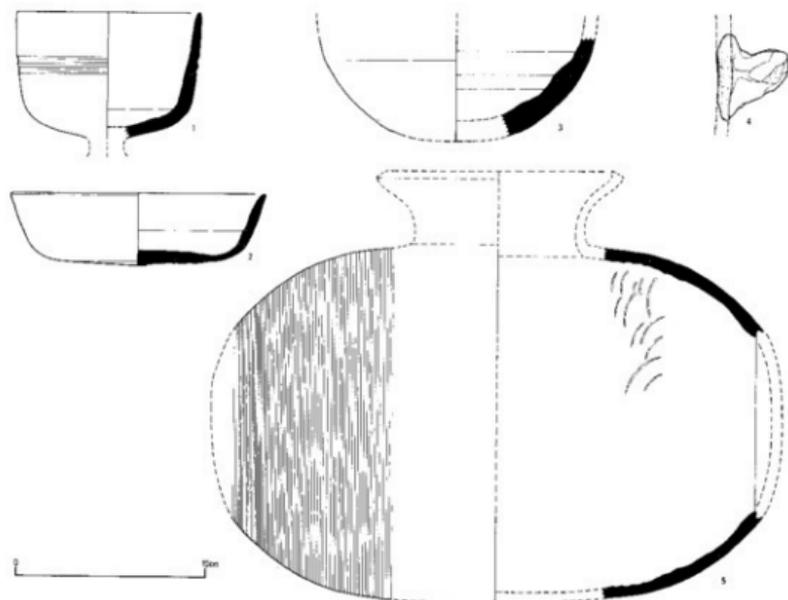
遺物としては石室床面より鉄釘15本、刀子1点、須恵器1点、鉄滓4点、周溝埋土中より鉄滓、須恵器、土師器、弥生土器片若干が出土した。

須恵器 (第35図)

1は石室内より唯一出土した須恵器である。焼成は非常に堅緻で灰白色を呈す。内外面とも部分的に淡緑色の自然釉が認められる。外面中位には2条の凹線文がめぐる。2～5は周溝埋



第34図 ビシャコ谷1号墳遺物出土状態 (S=1:20)



第35図 ビシャコ谷1号墳出土須恵器 (S=1:3)

土中の出土である。2は杯身、3は短頸壺、4は甔把手、5は横瓶のそれぞれ破片である。2の底部は回転ヘラ切りである。5の外面はカキ目、内面はナデであるが、部分的に青海波文が残る。製作工程を示す円盤充填の綾目痕が観察される。

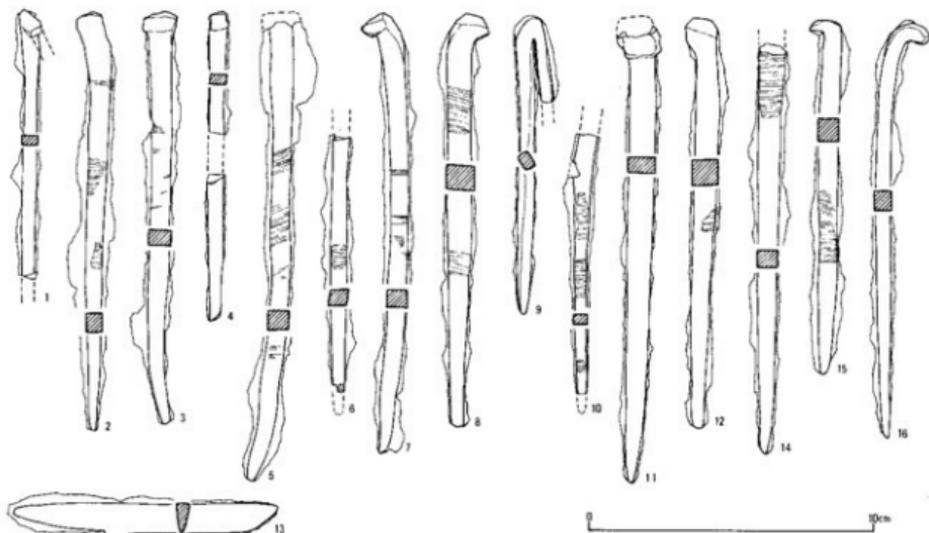
鉄釘・刀子 (第36図、図版6-13)

鉄釘は床面より計15本出土した。他に遊離した状態で数点の破片が出土していることから、実際にはもう少し数が増える。頭部、先端部、中位を欠くものもあるが、大小2つのグループに分類することができる。逆「L」字の頭部をもち、断面は正方形に近く、長さが12.5~16.5cmのもの(2・3・5~8・10・11・12・14~16)と長さ、幅、厚さとも全体的に小ぶりで、偏平な断面形を呈するもの(1・4・9)の2種である。1・9は途中で折れ曲がっているが鉄釘と考えられる。

13は刀子である。床面南端の偏平礫の上より出土した。長さ9.3cm、幅1cmを測る。刃部断面は二等辺三角形を呈す。

鉄滓 (図版6-10・11)

鉄滓は石室内からは奥壁側に3点、入口側に1点の計4点出土した。いずれも同一個体を砕いたものであり、BとCは接合する。周溝からは5点出土したがいずれも埋土上層部より出土



第36図 ピシャコ谷1号墳出土鉄器 (S=1:2)
(番号は遺物出土状態番号と同一である)

した。

不明遺構 (第37図, 図版3-3)

調査区の北東部に位置する。北側は調査区域外に位置するため未調査である。丘陵斜面を断面「L」字状に削平し、平坦面を形成する。平坦面には数個のピットが検出された。埋土は2層に分かれ、上層には炭粒が多量に含まれる。遺物もすべてこの層に包含される。

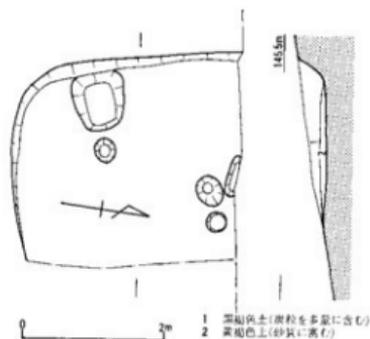
出土遺物

遺物としては多量の鉄滓と須恵器、土師器片少量が出土した。

須恵器 (第38図)

1～3は杯蓋である。口径は約11cm前後と非常に小さい。4は杯身、5は平瓶口縁部、6は短頸壺口縁部と考えられる。いずれも焼成が悪く、軟質であり、調整は不明である。

土師器 (第39図)

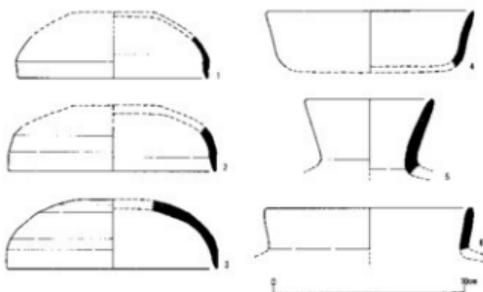


第37図 不明遺構平面・断面図 (S=1:80)

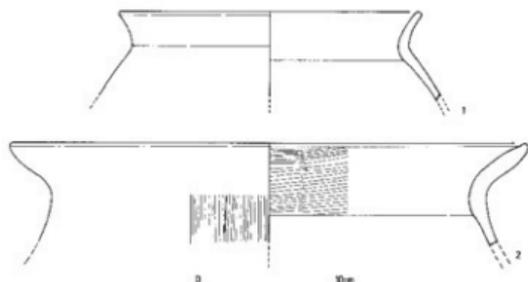
1・2は甕形土器である。1は遺存状態極めて悪く調整不明である。2は頸部から「く」の字状に外反する肥厚した口縁部をもつ。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げている。外面には縦方向、口縁部内面には横方向の荒いハケ目が観察される。

鉄滓 (図版6—15)

大小合わせて21点出土した。これらの中にはスサをかんだ炉壁と考えられる鉄滓、あるいは木炭をかんだ鉄滓も数点認められる。全体的に比重の非常に軽いものが多い。



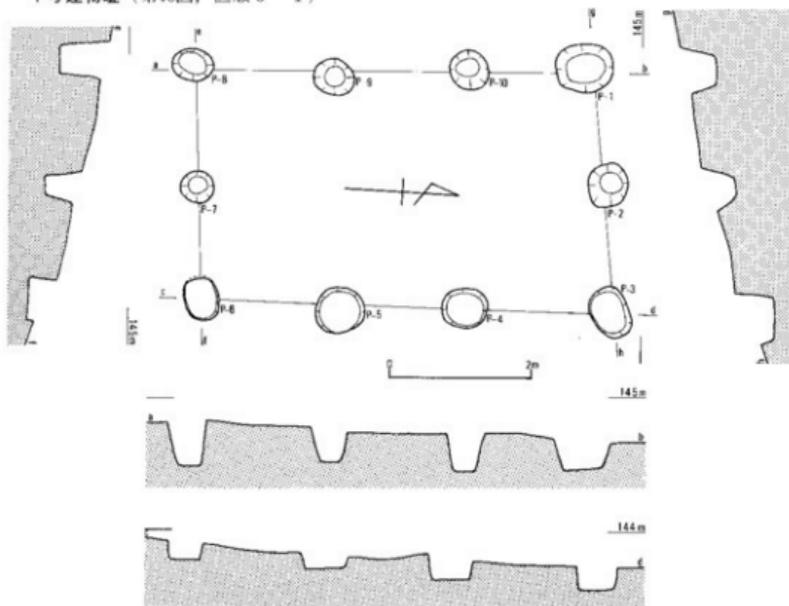
第38図 不明遺構出土須恵器 (S=1:3)



第39図 不明遺構出土土師器 (S=1:4)

3. 奈良時代

1号建物址 (第40図, 図版3—1)



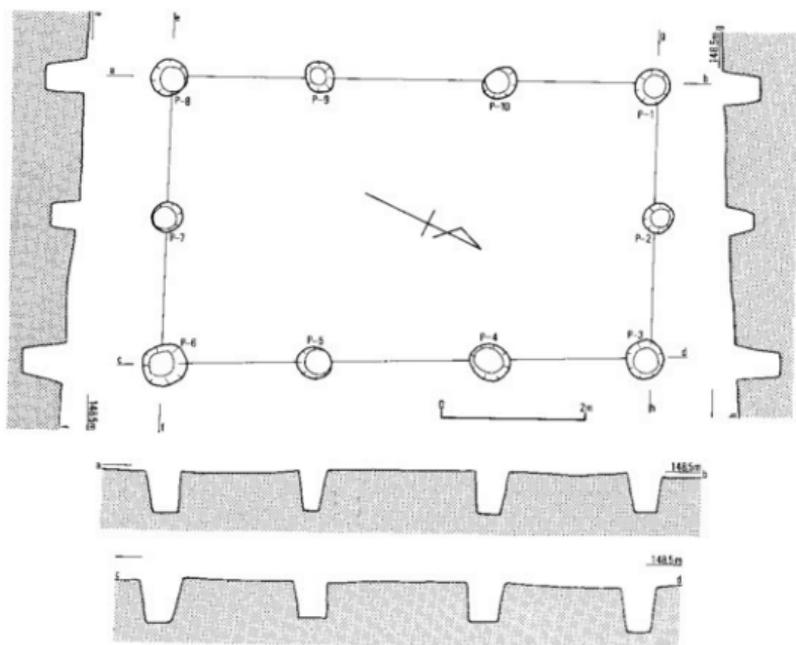
第40図 1号建物址平面、断面図 (S=1:80)

調査区東斜面部に位置する桁行3間、梁間2間の建物である。桁行方向は磁北と一致する。断面図に見られるように、柱穴底面のレベルは一定ではなく、傾斜にあわせて掘り込まれている。P-1・3・8・9埋土中より土師器片、P-5・6埋土中より須恵器片が出土している。また、P-8からは鉄滓1点(図版6-12)も出土している。

2号建物址(第41図, 図版3-2)

4号住居址の南西に隣接する。桁行3間、梁間2間の建物である。1号建物址より規模はやや大きい。構造は全く同様である。桁行方向の柱穴底面のレベルは多少の高低差はあれ、ほぼ同一であるが、両妻側中央柱穴は径も小さく浅い。P-1・6・7・9埋土中より鉄滓(図版6-16)が、またP-2・6・7・8・10埋土中より土師器、須恵器片が出土した。

本建物址の西側には丘陵斜面を「L」字状に削平した段が認められる。これは建物建設に先立つ造成工事と考えられるものである。



第41図 2号建物址平面、断面図(S=1:80)

2号建物址関連遺物

造成に伴う段の埋土中より鉄滓、須恵器が若干量出土した。これらの遺物は建物に伴うもの

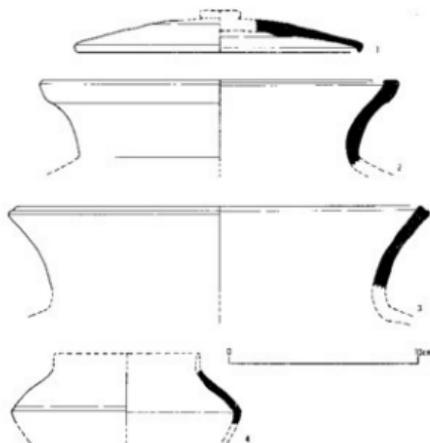
と考えられ、建物の時期決定に際し、重要な資料となる。

須恵器 (第42図)

1は杯蓋である。口縁部は短く内傾して下り、端部は丸い。2・3は甕である。両者とも頸部から大きく外反する口縁部をもち、端面には凹み認められる。2は端部に近づくにつれ肥厚し、端面へといたる。端面は水平に内側にやや張り出す。4は肩部がそろばん玉状に張り出した短頸甕と考えられる。

鉄滓 (図版6—14)

計9点出土した。木炭、スサをかんだ鉄滓も認められる。全般に比重は軽くスカスカしている。



第42図 2号建物址関連遺物 (S=1:3)

溝状遺構 (第43図, 図版3—4)

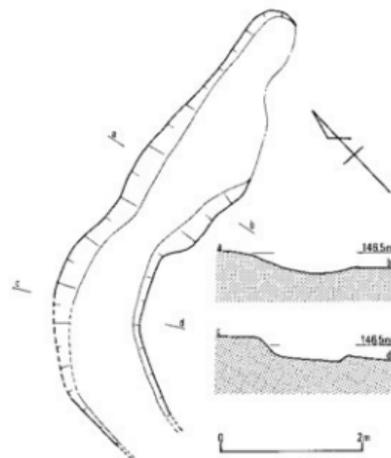
2号住居址を切って位置する。「L」字状の平面形を呈す幅約1m前後を測る浅い溝状遺構である。南側は木の根により攪乱されている。床面東端はそのまま自然傾斜へと移行する。

出土遺物

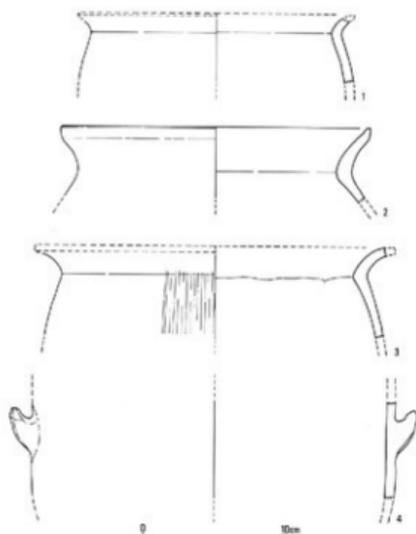
埋土は1層であり、鉄滓、須恵器、土師器片がびっしりつまっていた。

須恵器 (第44図)

1~4は杯蓋である。2~3には扁平なつまみがつく。1の口縁部はやや内傾して下り3はやや外傾して下る。1は頂部から口縁部にかけてゆるやかなカーブを描いて移行するのに対し、2・3は中位で段をもつ。5・6は高台付杯である。5の高台は垂直に立つのではなく、底部から外方に張り出す。7は壺である。頸部からやや外傾して立ち、端部に近づくにつれ内傾する。端面は斜方向に内傾する。外面には1条の凹線文をもつ。



第43図 溝状遺構平面, 断面図 (S=1:80)



第45図 溝状遺構出土土師器 (S=1:4)

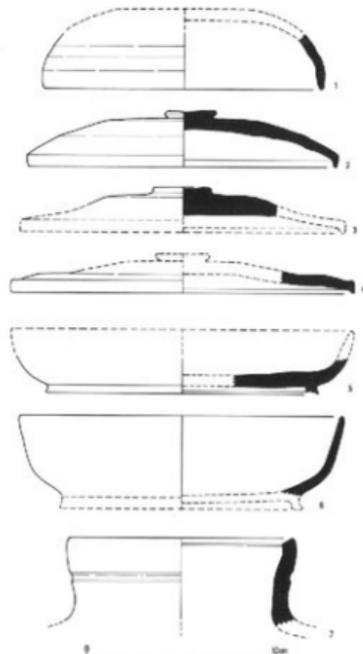
土師器 (第45図)

遺物はかなり出土したが、小片であるため図示できるものは少ない。1～3は甕形土器である。4は甕形土器である。2は4の甕形土器と

胎土が類似していることから同一個体の可能性もある。1・3は頸部から弧を描きながら外反する口縁部をもつ。いずれも遺存状態は極めて悪い。

鉄滓 (図版6-17)

計22点出土した。内1点は鉄片である。スサ、木炭の痕跡が認められるものがある。やはり比重は軽くスカスカしている。

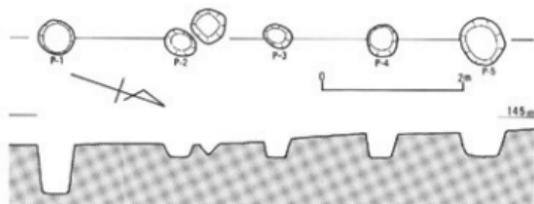


第44図 溝状遺構出土土師器 (S=1:3)

4. その他の遺構と遺物

1号柱穴列 (第46図, 図版3-1)

1号建物址の西側に隣接する。P-1～P-5の5個の柱穴からなる。P-2～P-5の4個の柱穴底面はほぼ同一レベルであり、P-1だけ



第46図 1号柱穴列平面、断面図 (S=1:80)

は深い。このため、P-1を含めない方がいいと考えたが、ちょうど延長線上に位置するためあえて加えた。遺物としてはP-2より上石器と考えられる赤褐色土器片、須恵器数点が出土した。須恵器の中には内面に青海波文の認められるものもある。

2号柱穴列 (第47図, 図版3-5)

調査区ほぼ中央部北寄り等高線走向に平行して位置する。P-1～P-4の4個の柱穴よりなる。P-1は3号柱穴列P-5と重複する。P-1は他の3個に比べやや深い。遺物は出土しなかった。

3号柱穴列 (第47図, 図版3-5)

2号柱穴列と重複し、等高線走向に平行して位置する。P-1～P-8の8個の柱穴よりなる。P-4は2個の柱穴が重複している。P-4・P-5を境にして主軸は交わる。南側のP-5～P-8の4個の柱穴は規模、構造ともほぼ同一であるが、北側P-1～P-4の4個の柱穴は、径、深さ、心々距離ともばらつきがある。北と南の2つに分けて考える方が妥当かも知れない。遺物は出土しなかった。

ビット群 (第5図)

建物等にならない大小多数のビットが検出された。これらのビットの中には鉄滓を含むもの、須恵器を含むものなどがある。

以下、遺物を

出土した。ビット

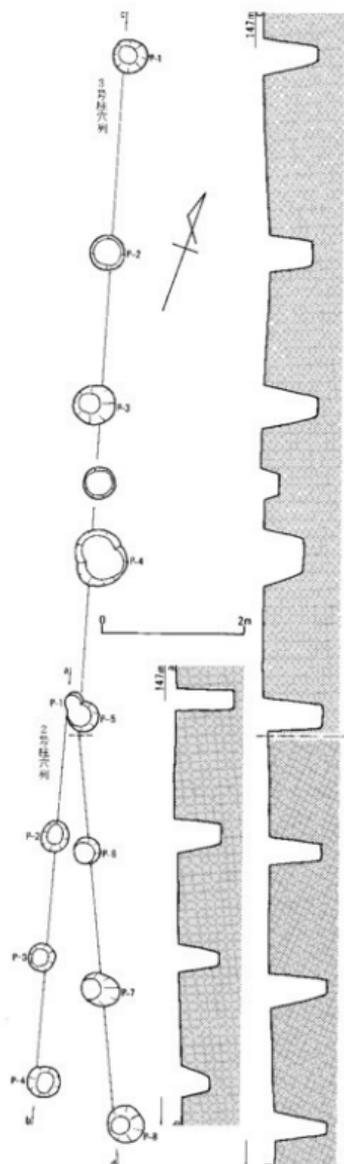
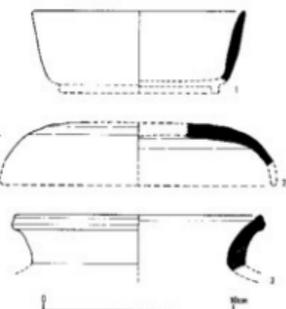
について

一覧表を付し

ておく。ビット

番号は第5

図遺構配置図



第48図 ビット群出土須恵器 (S=1:3) 第47図 2号, 3号柱穴列平面, 断面図 (S=1:80)

を参照のこと。赤褐色土器片としたものは小片であるため、弥生土器、土師器の区別のつかないものである。

遺物出土ピット一覧表

グリッド	ピット番号	出土遺物	出土状態	その他	グリッド	ピット番号	出土遺物	出土状態	その他
E-3	P-1	赤褐色土器片数点	埋土中		E-4	P-7	赤褐色土器片数点	埋土中	
F-3	P-1	赤褐色土器片1点	*			P-8	須恵器1点	*	第487号
G-3	P-1	◇	*		F-4	P-1	赤褐色土器片1点	*	
	P-2	鉄滓1点	*			P-2	須恵器1点、土師器1点	*	
	P-3	◇	*		G-4	P-1	鉄滓1点、須恵器1点	*	2号墳跡 P-4出土 赤褐色土 器片2片 一箇 第487号
	P-4	鉄滓4点	*			P-2	須恵器1点	*	
D-4	P-1	鉄滓2点、赤褐色土器片3点	*			P-3	鉄滓1点	*	
	P-2	須恵器1点、赤褐色土器片1点	*			P-4	須恵器1点	*	
	P-3	鉄滓1点	*		P-5	赤褐色土器片1点	*		
E-4	P-1	須恵器1点	*		P-6	赤褐色土器片数点	*		
	P-2	◇	*		E-5	P-1	◇	*	
	P-3	鉄滓1点、赤褐色土器片数点	*			P-2	◇	*	
	P-4	赤褐色土器片数点	*			P-3	◇	*	
	P-5	◇	*		F-6	P-1	赤褐色土器片1点	*	
	P-6	須恵器1点、赤褐色土器片数点	*	第487号					

IV ま と め

1. 各遺構の時期について

弥生時代とした遺構の中には1号住居址、2号住居址との関係、あるいは5号長方形住居状遺構、6号住居址、7号住居址との関係のように当然同時併存しない状況が認められる。このことは最低3時期が重複していることを証明するものである。しかしながら、遺構の切り合い関係による新旧関係は把握できるものの、この時期差が土器の変化として現われてこない今日の土器編年研究の状況の中で多くを論じるわけにはいかない。このため、弥生時代とした遺構の時期は広義の意味を含めて弥生時代中期後半としておきたい。

ビシャコ谷1号墳出土の須恵器には石室内のものと周溝埋土中出土のものがある。個々の比較をすると多少の時期差はあるように思えるが、石室内出土の台付椀からみて7世紀前半頃と考えられる。不明遺構出土の須恵器杯は口径が小さくなった段階のものであり、6世紀末～7

世紀初め頃の時期と考えられる。

2号建物址は造成面の埋土から出土した須恵器からみて、8世紀代に属するものと考えられる。1号建物址も規模、構造がほぼ同様であることから同時期のものと考えたい。溝状遺構も出土した須恵器からみて建物址と同時期と考えられよう。

2. 段状施設について

段状施設とは住居の掘形外方にめぐる幅約50cm程度の平坦面をいう。最初に段状施設という名称を用いたのは押入西遺跡(註1)である。本遺跡でも段状施設という名称を用いたが、他に棚という呼称もなされている(註2)。すでに指摘されているとおり(註3)であるが、この施設を有する住居址は壁の高さがそのまま保存されることから、当時の掘り込みの深さがそのまま理解されるのである。本来、竪穴住居址の掘形外方には普遍的に付設されていたものと考えられ、これが削平の深度により施設の有無をもたらすものである。この施設を有する住居址の壁の高さはまちまちであり最も浅いものは荒神西遺跡2号住居址(註4)の35cm、最も深いものは芦ヶ谷遺跡1号住居址(註5)の87cmを測るが、平均して50~60cm前後である。

この種の住居址が検出される遺跡は丘陵遺跡に限定され、山側に半円状に残存する場合が多い。

3. 段状遺構について

段状遺構という名称は押入西遺跡が初現である。他に、地山整形遺構(註6)等の呼称もされている。この種の遺構は丘陵に立地する遺跡に普遍的に見られるもので、丘陵斜面を断面「L」字状に削平し、平坦面を形成しているものである。従来、谷側は流失したものと考えられ、住居址あるいは住居状遺構として取り扱われていたものが多分にある。平坦面には柱穴を伴うもの、壁に沿って溝をもつもの、焼土面をもつものなど様々である。また、平面形も、等高線走向に沿って帯状に長くのびたものなどバラエティに富む。さらに、これらは重複した状態で検出されることが多く、遺構数の認定、切り合いの新旧関係等遺構の理解をより困難にする原因となっている。

この遺構には独立して位置するものと、住居址あるいは建物址に近接するものの2種が認められる。前者には1つの機能を与えることができるが、後者は押入西遺跡例に見られるように建物を有するもの、あるいは住居外方に延びる溝が段状遺構の壁で終結する事実等合わせ考えて、住居址、建物址との密接な関係の中で把握されなければならない。本遺跡例においては、居住区の設定、あるいは住居外に延びる溝が段状遺構に取り付いていることから総体としての住居の付属施設と考えたい。

4. 鉄斧について

2号住居址埋土中より鉄斧1点が出土した。2号住居址の時期は弥生時代中期後半頃と考えられる。他にこの時期における岡山県内の鉄斧出土例は船込遺跡(註7)の1例だけである。鉄斧以外の鉄製品を出土した遺跡に目を向けても沼遺跡(註8)、雄町遺跡(註9)、只穀山遺跡(註10)、船込遺跡、押入西遺跡(註11)など数例を数えるにすぎない。沼遺跡、雄町遺跡、船込遺跡では鉋、只穀山遺跡では鉄鏝、押入西遺跡では不明鉄器がそれぞれ1点ずつ出土している。このことは、弥生時代前期に九州の地において使用の開始された鉄製品が、やっと中期の段階になって県内にも普及しはじめたということを物語るものであろう。

5. 5号長方形住居状遺構の築造について

前述したように、5号長方形住居状遺構は7号住居址の真上に規則性をもって築かれたかのように位置する。すなわち、南辺の両端コーナー部は円形プランを呈す7号住居址円周と合致し、また、両長辺は円周より内側に同等の距離をおいて設定されているのである。

7号住居址P-4側の壁にそって床面から約20cm程浮いた状態で緑色片岩の自然礫を数個ずつおいた個所が2ヶ所認められた。P-2方向の段状施設平坦面にも同様の状況が認められる。P-1方向には検出されなかったが、これらの配石の位置はちょうど5号長方形住居状遺構の各コーナー部に合致するのである。

さらに、a-bの土層断面を観察すると層と層の間にはすべて薄い焼土層が認められるのである。このことは人為的に埋めたことを窺わせる。住居は凹みを全てを埋めるのではなく途中まで埋め、掘形の段をそのまま利用し5号長方形住居状遺構の床面としているのである。以上のことから、大胆な憶測ではあるが、3ヶ所の配石と不自然な土層堆積は本住居址がある程度埋没した後石を配し、人為的に住居を埋め5号長方形住居状遺構を形成するための基礎作業ではなかったのであろうかということが想起されるのである。

6. 長方形住居状遺構について

本遺跡では長方形住居状遺構という名称を用いたが、発見当初から今日にいたるまでほとんどの遺跡で住居址あるいは建物址という取り扱いがなされてきた。この中にあって沼遺跡では住居址とは明らかに異なった一定の機能を具備した1つの独立した遺構として「作業場ないし物置」という性格付けがなされたことは画期的な評価といえよう(註12)。さらに、この遺構に長方形竪穴住居状遺構という名称を与え、沼遺跡の調査成果を踏まえつつ、総体として弥生時代中期小住居群構造を積極的に論じたのは沼E遺跡での調査成果である(註13)。

ここで取り上げる長方形住居状遺構とは床面長軸中心線上に非常に良く焼けた焼土面をもち長方形プランを呈す無柱穴の竪穴式遺構に限定する。他に類似遺構として、沼E遺跡第1次調査建物I(註14)、西江遺跡5号建物(註15)、押入西遺跡3号住居址(註16)等の床面に焼土面

をもつ竪穴式建物址が存在する。この種の遺構は性格的には長方形住居状遺構と同一のものと考えられるが、ここでは含めないことにする。これは削平の深度により、床面が残る場合と残らない場合が考えられ、後者の場合掘立柱建物址との区別がつかなくなり、この混乱をさけるためである。床面の周囲には壁に沿って溝がめぐる。また、立地は本遺跡例のように長辺が等高線走向に平行する場合は案外少なく、等高線走向に直行するものが多い。この場合、谷側は流失しており、山側にだけ残存する。

この遺構は数軒の住居址あるいは建物址に対し、1軒だけ存在することが大きな特徴である。

次に、時期の問題であるが、現在までのところ中期中葉の沼E遺跡例が最古のようである。最も新しいものとしては後期後半の野田畝遺跡例(註17)等が散見されるが、やはり圧倒的多数を占めるのは中期後半の時期である。後期の前半については今のところ知り得てない。

さて、この遺構の性格であるが、沼遺跡K竪穴址で「作業場ないし物置」の可能性が指摘されて以来、長い間この考え方が採用されてきた。しかしながら、住居址としての可能性も今日にいたるまで多くの調査で報告されてきている。最近、このような状況の中で沼E遺跡の調査から新たな見解が提起された。従来の「作業場ないし物置」「住居址」説を否定し、「共同の炊事小屋」説が登場することになったのである。この背景には、非常に良く焼けた焼土面を有することが根拠になっており、火を焚くことが本来の機能にかかわった遺構であると考えられている。そして、火焚き場として使用されたものであり、ひいては「共同の炊事小屋」としての結論を導き出している。さらに、個々の竪穴で炊事が行われなかったとするものではないとの考え方も付け加えられている(註18)。

本遺跡の5号長方形住居状遺構の場合、遺物の出土状態等他のこの種の遺構とは全く異なった在り方を呈している。南半には土器がびっしりと置かれ、北半では火が焚かれている。この状態の中で「作業場あるいは物置」の可能性は考えられない。また、「共同の炊事」も足の踏み場もない程の土器の中では不可能であろう。従って、本遺構は遺物の出土状態からみて、祭祀的行為の結末という考え方を採用せざるを得ない。この祭祀が何を目的にどのように執り行われたかは埤測の域を出ないのであるが、ちょうど北辺側には床面よりやや高い段をもっていること、あるいは装飾性豊かな壺形土器が多数出土していることなどさらにその可能性を示唆させるかのようである。

ただ、ここで明記しておかなければならないことは、本遺構の遺物出土状態の類例が他に見当たらないことから、この種の遺構の第1次的機能の結果として把握されるべきか否かという問題を整理しておかなければならない。この問題については祭祀を目的とした第2次的機能を考えている。では、本来の第1次的機能とは何であろうか。前述したように、この遺構は数軒の住居址に対して、1軒しか存在しないことが大きな特徴である。換言すると1単位集団に1軒存在したことになり、単位集団の共同使用が考えられるのである。集団内における共同使用

施設には、共同の炊事場、共同の作業場、共同祭祀の場、集会所等様々な機能が考えられるが
いずれも確固たる証拠を持ち合わせてないのが現状であろう。従って、本稿では結論を急がず
「火を伴う共同使用施設」という広義の枠の中で理解しておきたい。

最後に、この遺構の類例であるが、最初の発見は古く、中国地方における竪穴住居址発見例
となった御崎野遺跡（註19）、野田遺跡（註20）の調査にまでさかのぼる。以下、県内における
今日まで知り得た調査例を挙げておく。

遺跡名	遺構名	時期	参考文献	註
御崎野遺跡	第3号竪穴 第8号竪穴	中期後半～後期	中島寿雄・近藤義郎「岡山県御田郡御崎野遺跡」『日本考古学年報4』日本考古学協会1951年	19
野田遺跡	長方形遺構	中期	近藤義郎「岡山県御田郡野田遺跡」『日本考古学年報4』日本考古学協会1951年 浅野 正・高村敏夫・西山 康「北志野村史」北志野村史編纂会1966年	20
沼遺跡	K 竪穴址	中期後半	近藤義郎・渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」津山市・津山郷土館1967年 近藤義郎「共同体と単位集落」『考古学研究第6巻1号』考古学研究会1969年	8 12
船山遺跡	2号住居址	中期後半	日本知秀・正岡隆夫・新東晃一「船山遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972年	9
除町遺跡	第3調査区9号住居址	中期後半	高橋 源・正岡隆夫・日本知秀・梶原克人・中力 昭・伊藤 寛・栗野克己「御町遺跡」『埋蔵文化財 発掘調査報告』岡山県教育委員会1972年	9
餅込遺跡		中期後半	1976～78年にかけて草加部工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未完。	
且原遺跡	2・14・16、14住居址	不明	原仲知功・山藤康平「且原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告14』岡山県教育委員会1977年	
野田畝遺跡	No. 52 住居址	後期後半	高畑知功・福川正融「野田畝遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会1977年	17
惣国遺跡	第2地点25号住居址	不明	神原英郎「惣国遺跡第2地点」『用木山遺跡』岡山県岡山県新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財 発掘調査報告4。山陽町教育委員会1977年	
用木山遺跡	第4支群11号住居址	中期後半	神原英郎「用木山遺跡」『用木山遺跡』岡山県岡山県新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘 調査報告4。山陽町教育委員会1977年	
芦ヶ谷遺跡	4号住居址	不明	村上幸雄「芦ヶ谷遺跡」『船山遺跡群I』『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』久米開発 事業に伴う文化財調査委員会1979年	
荒神遺跡	13号住居址	後期後半	村上幸雄「荒神遺跡」『船山遺跡群I』『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』久米開発事 業に伴う文化財調査委員会1979年	
	20-1 2号住居址	不明		
沼日遺跡	第1次調査住居址4 第2次調査住居址4 第3次調査住居址4	中期中葉	河本 清・柳瀬昭彦「沼日遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告9』岡山県教育委員会1979年 中山健紀・行田裕美「沼日遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8巻』津山市教育委員会1983年	14 13-18
東蔵坊遺跡	B地区6号住居址	中期後半	安川豊史「東蔵坊遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9巻』津山市教育委員会1981年	
アモウ遺跡	S H 111	中期後半	1981～82年にかけて広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未完	
押人西遺跡	長方形住居址遺構1	中期後半	清 哲夫・安川豊史・行田裕美「押人西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第14巻』津山市教育委 員会1983年	11
	長方形住居址遺構2	*	*	

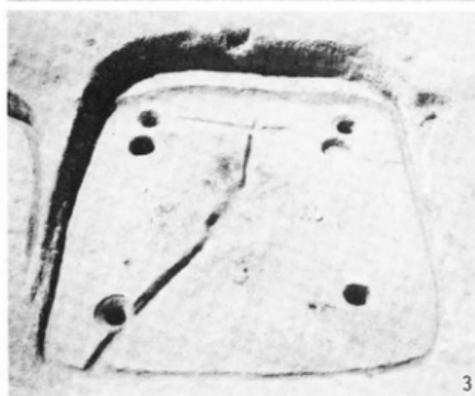
- (註1) 河本 清・橋本惣司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦「押人西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員
会1973年
- (註2) 村上幸雄「船山遺跡群I」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』久米開発事業に伴う文化財調査委員会1979年
- (註3) *
- (註4) 村上幸雄「荒神西遺跡」『船山遺跡群I』『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』久米開発事業に伴う文化財
調査委員会1979年
- (註5) *
- (註6) 井守徳男・山本三郎・渡辺 昇・大平 茂・佐藤良二・榎本誠一・宮嶋雅仁・永川富夫・西尾知恵子「赤カ利与遺跡」『北
摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』『兵庫県文化財調査報告書第16冊』兵庫県文化協会1983年
- (註7) 1976～78年にかけて草加部工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施。報告書未完。
- (註10) 近藤義郎・小野 昭「岡山県貝笠山遺跡」『高地性集落跡の研究』1979年
- (註15) 田仲漢彦・正岡隆夫・二宮治夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会1977年
- (註16) (註1) 前掲書



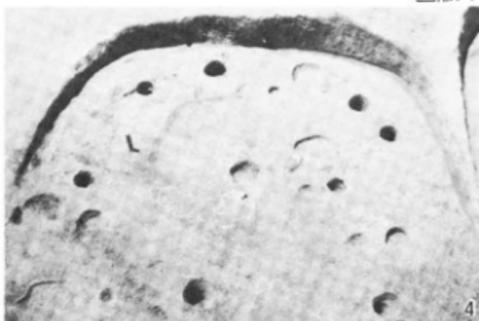
1



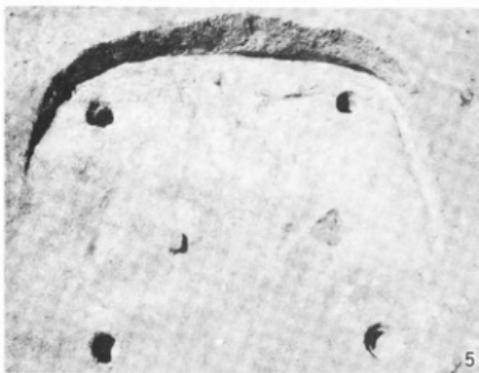
2



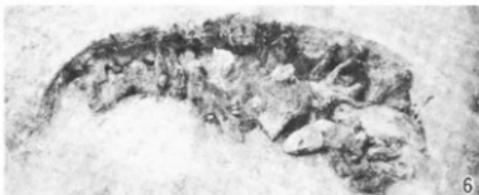
3



4



5



6



7

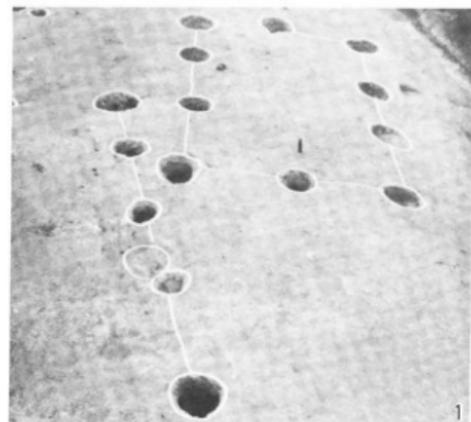
1. 道神溪景 (西水石)
2. " (東水石)
3. 1号住居址 (東水石)
4. 2号住居址 (東水石)

5. 3号住居址 (西水石)
6. 3号住居址炭化柱出土状態 (西水石)
7. " (東水石)



1. 4号住居跡（東から）
2. 5号長方形住居状遺構、6号住居跡（東から）
3. 5号長方形住居状遺構遺物出土状態、6号住居跡（東から）
4. 5号長方形住居状遺構遺物出土状態（東から）

5. 5号長方形住居状遺構遺物出土状態（南から）
6. 6号・7号住居跡（東から）
7. ビシャコ谷1号塚（南から）
8. ビシャコ谷1号墳遺物出土状態（南から）



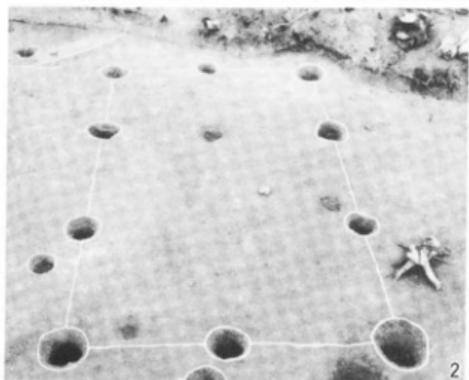
1



4



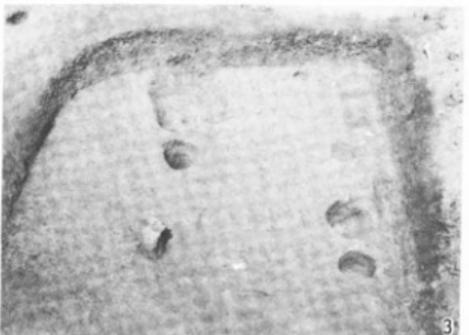
5



2



6



3



7

1. 1号建物址、1号柱穴列 (南から)
 2. 2号建物址 (南から)
 3. 不明遺構 (東から)
 4. 溝状遺構 (西から)

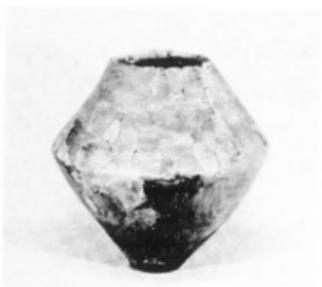
5. 2号・3号柱穴列
 6. 遺跡西半全景 (東から)
 7. 遺跡東半全景 (西から)



5号長方形住居状遺構末面出土土器(1)
(数字は実測図番号と同一である)



11



16



18



13



15



26



27



14



19



25



10



21



20

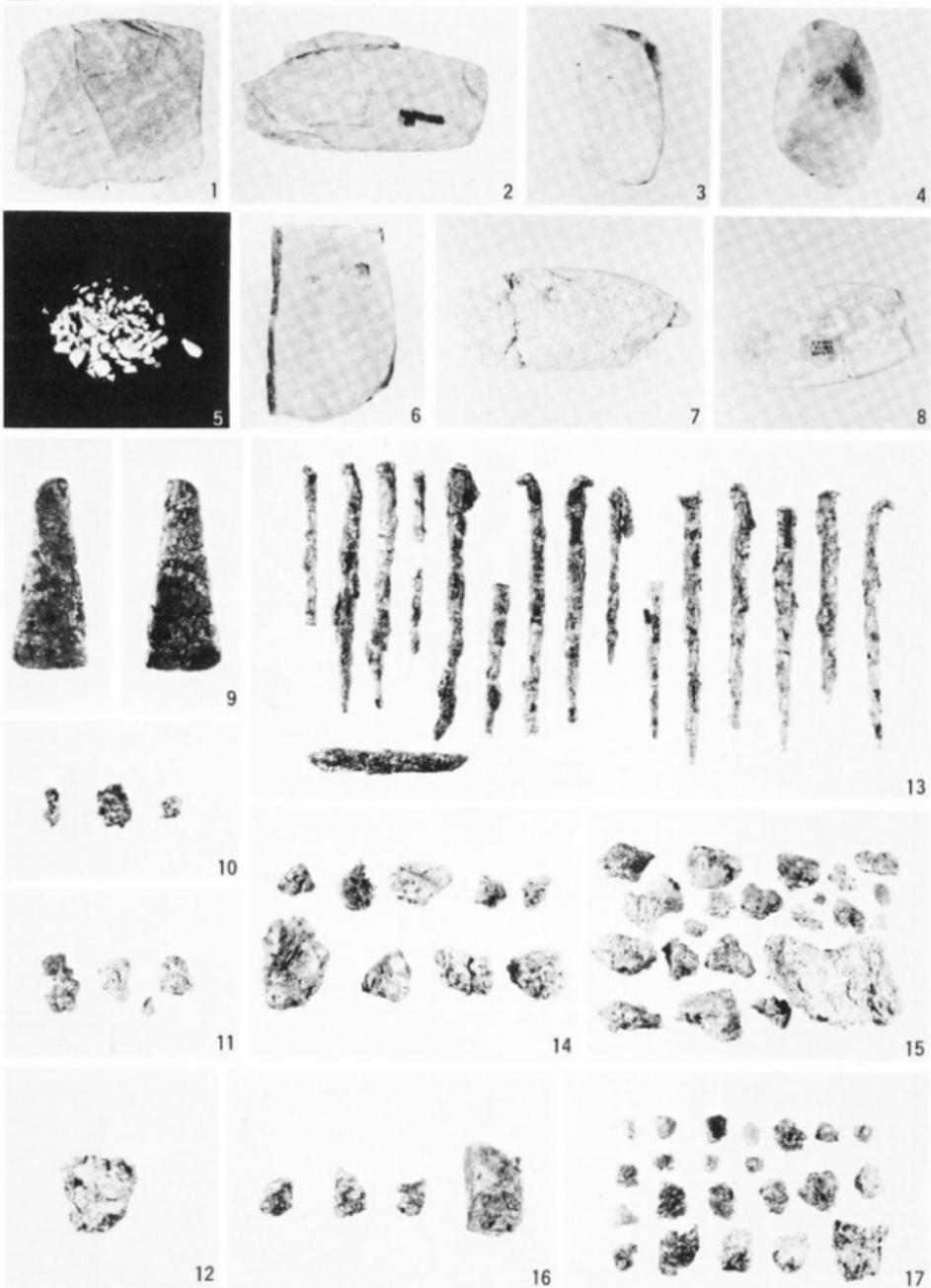


24



22

5号長方形住居状遺構床面出土土器(2)
(数字は実測図番号と同一である)



出土石器・鉄器及び鉄滓

- 1. 5号長方形住居状遺構断面
- 2. 4号住居址埋土
- 3. 1号住居址埋土
- 4. 2号住居址埋土
- 5. 2号住居址埋土

- 6. ビシャコ谷1号墳石室床面
- 7. ビシャコ谷1号墳高岡埋土
- 8. 1号建物址柱穴埋土
- 9. ビシャコ谷1号扇石室床面
- 10. 2号建物址遺構面埋土

- 11. 不明遺構埋土
- 12. 2号建物址柱穴埋土
- 13. 溝状遺構埋土

(付) ビシャコ谷遺跡出土鉄滓及び鉄斧の金属学的調査

1 概要

大澤 正 己

ビシャコ谷遺跡は、津山市下高倉西ビシャコ谷に所在し、弥生・古墳・奈良時代へかけての複合遺跡である。この内7世紀前半に属すると考えられるビシャコ谷1号墳出土鉄滓、8世紀頃と考えられる2号建物址柱穴並びに溝状遺構出土鉄滓、6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる不明遺構出土鉄滓及び弥生時代中期の鉄斧の調査依頼を津山市教育委員会より受けたので、鉱物組成と化学組成の調査から金属学的検討を行った。

調査結果は次の通りである。

- (1) ビシャコ谷1号墳石室床面出土の鉄滓は砂鉄製錬滓であり、周溝埋土出土の鉄滓は鉱石製錬滓である。両者は古墳供献鉄滓であり、同古墳近くで7世紀前半代に砂鉄と鉱石の並列製錬が操業されたことを裏付ける貴重な資料となる。砂鉄と鉱石両製錬滓の鉱物組成と化学組成の差異は下表の通りである。

	出土位置	原料分類	鉱物組成	化学組成			
				TiO ₂	V	CaO	Total Fe
1号墳出土鉄滓	石室	砂鉄製錬滓	マグネタイト + フェアライト (Fe ₃ O ₄) (2FeO・SiO ₂)	7.71	0.092	4.51	39.5
	周溝	鉱石製錬滓	フェアライト + ヴスタイト (2FeO・SiO ₂) (FeO)	1.32	0.031	12.27	39.5

- (2) 2号建物址柱穴及び溝状遺構出土鉄滓は砂鉄製錬滓であった。鉱物組成はマグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) + フェアライト (Fayalite: 2FeO・SiO₂) であり、化学組成は、酸化チタン (TiO₂) が7.8～10.6%、バナジウム (V) 0.12～0.21%である。2号建物址は2間×3間の建物であり、10ヶ所の柱穴より構成される。この内4ヶ所の柱穴より鉄滓が出土しており、祭祀的埋納の可能性が大きい。静岡県河津町の姫宮遺跡 (註1) に類似がみられる。

- (3) 不明遺構出土鉄滓は砂鉄製錬滓であった。こちらの鉱物組成はチタン (Ti) 分の高い鉄滓に品出するイルミナイト (Ilmenite: FeO・TiO₂) とウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO・TiO₂) で構成される。化学組成で二酸化チタン (TiO₂) は11.68%、バナジウム (V) は0.23%と高目である。

- (4) 弥生時代中期に比定される2号住居址埋土中出土鉄斧は、鉱石系素材の鍛造品と推定される。鉄斧基形を損なわない程度の剥片を採取し、鉄中に含有される非金属系介在物 (製錬や精錬過程で除去しきれなかった非金属粒子や脱酸生成物) を走査型電子顕微鏡による観察とEDAX (エネルギー分散型半導体検出器) による局部分析から検討したが、介在物の量が非常に少なく組成にチタン (Ti) が検出されず、けい素 (Si)、鉄 (Fe)、アルミニウム (Al)、カリ (K)、ナトリウム (Na)、カルシウム (Ca) らの存在から砂鉄系は否定された。鉄斧外観は長さ約9

表2 鉄滓の化学組成

符 号	遺跡名	遺 構 名	鉄滓分類	推 定 年 代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミナ (Al ₂ O ₃)	
S-831	ビシャコ谷	1号墳石室床面No4	砂鉄製鉄滓	7世紀前半	39.5	44.4	7.12	26.1	6.33	
S-832	*	1号墳周溝埋土	鉱石製鉄滓	*	39.3	42.6	8.90	26.2	5.48	
S-833	*	2号建物址P7	砂鉄製鉄滓	8世紀	43.5	48.4	8.36	19.62	5.86	
S-834	*	溝状遺構埋土	*	*	37.3	42.4	6.20	27.6	7.09	
S-835	*	不明遺構埋土	*	6世紀末~7世紀初	30.7	35.1	4.93	26.6	7.75	
参 考 値	C-831	東 農 坊	1号墳周溝	*	32.2	34.2	8.09	30.9	10.20	
	C-832	*	A地区C-8(第1層)	鉱石製鉄滓	*	44.1	45.8	12.11	26.06	5.44
	C-835	*	A地区4E区第1層	*	38.4	26.01	26.0	25.86	6.16	
	W-821	六 塚 塚	1号墳北西隅	鍛鉄製鉄滓	6世紀初~前半	55.1	46.6	27.0	14.94	3.97
	U-822	狐 塚 塚	遺構構	*	6世紀末~7世紀初	61.0	62.6	17.67	9.88	2.08

註1. 大澤正巳「ビシャコ谷遺跡出土鉄滓及び鉄滓の全元素の調査」本報告

註2. 安川豊史「東農坊遺跡B地区発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第9集』津山市教育委員会1981年
大澤正巳「築洲古墳群出土鉄滓の調査」『築洲古墳群』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第13集』津山市教育委員会1983年

cmのバナ形で袋部や折り曲げ部を有していない。大陸からの搬入素材を列島内で鍛造加工した可能性が強い。西日本の弥生鉄器は数例の調査結果であるが、いずれも鉱石系である(註2)。

2 供試材と調査方法

供試材の履歴と調査項目を表1に示す

表1 供試材の履歴及び調査項目

符号	供 試 材	大 き さ		出 土 位 置	推 定 年 代	調 査 項 目		
		サイズ(mm)	重量(g)			顕微鏡組織	化学組成	E.D.A.X
S-831	粘土質流石滓 (砂鉄製鉄滓)	40×35×25	45	ビシャコ谷1号墳 石室床面No4	7世紀前半	○	○	
S-832	人工磁石鉄滓 (鉱石製鉄滓)	35×30×20	50	ビシャコ谷1号墳 周溝埋土	*	○	○	
S-833	磁石鉄滓 (砂鉄製鉄滓)	45×40×30	95	2号建物址P7	8世紀	○	○	
S-834	伊内残留滓 (砂鉄製鉄滓)	65×30×37	145	溝状遺構埋土	*	○	○	
S-835	伊内残留滓 (砂鉄製鉄滓)	50×50×50	190	不明遺構埋土	6世紀末~7世紀初	○	○	
S-836	鍛造鉄滓	90×37×13	56	2号住居址埋土	弥生時代中期	○		○

3 調査結果

(1) ビシャコ谷1号墳石室床面出土鉄滓(S-831)

肉眼観察：表皮は剝落して二次面は黒褐色を呈し、気泡を多発している。裏面は黒色で耐火材粘土と反応した痕跡の凹凸を有している。破面は黒褐色を呈し気泡を発しているが比較的

酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	渣滓成分 Total Fe	渣滓成分 Total Fe	TiO ₂	註
4.51	1.99	1.02	7.71	0.041	0.041	0.39	0.08	0.094	0.002	38.93	0.986	0.195	1
12.27	1.69	0.92	1.32	0.031	0.051	0.27	0.18	0.031	0.004	45.64	1.161	0.036	◇
3.30	1.49	1.25	10.61	0.049	0.040	0.28	0.09	0.21	0.003	30.27	0.696	0.244	◇
4.62	1.76	1.03	7.81	0.046	0.035	0.43	0.12	0.12	0.004	41.07	1.101	0.209	◇
5.12	1.43	1.25	11.68	0.060	0.025	0.21	0.01	0.23	0.004	40.90	1.332	0.381	◇
5.32	1.64	0.93	7.84	0.031	0.054	0.20	0.05	0.15	0.004	48.06	1.493	0.243	2
5.04	0.96	1.45	0.48	0.008	0.034	0.29	0.15	0.095	0.008	37.50	0.850	0.011	3
5.54	0.74	1.26	0.35	0.006	0.082	0.31	0.25	0.008	0.004	38.30	0.997	0.009	◇
0.17	1.24	0.12	0.19	Nil	0.082	0.33	0.27	0.006	0.004	20.32	0.369	0.003	4
0.25	1.02	0.16	0.10	0.040	0.037	0.23	0.27	0.005	0.026	13.17	0.216	0.002	5

註3 安川豊史前掲書

A・B両地区出土鉄滓の調査結果は未発表資料

註4 大澤正己前掲書2

註5 大澤正己「孤塚出土の鉄滓と鉄塊について」『孤塚遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第2集』1974年

緻密である。

顕微鏡組織： 図版1に示す。鉱物組成は白色多角形状のマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)と淡灰色盤状結晶のフェアライト(Fayalite: 2FeO・SiO₂) それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成されている。

化学組成： 表2に示す。二酸化チタン(TiO₂)が7.71%、バナジウム(V)0.094% 渣滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO)が38.93%と高目から砂鉄製錬滓に分類できる。

(2) ビシャコ谷1号墳周溝埋土出土鉄滓(S-832)

肉眼観察： 人工的破砕面で赤褐色を呈する鉄滓である。破面は黒色半光沢で気泡はなく緻密。

顕微鏡組織： 図版1に示す。鉱物組成は淡灰色盤状結晶のフェアライトが主体で、これに少量の白色粒状結晶のヴスタイト(Wüstite: FeO)が樹枝状に晶出している。

化学組成： 表2に示す。二酸化チタン(TiO₂)が1.32%、バナジウム(V)0.031%と両者低く、渣滓成分が45.64%と高目であり、特にこのなかの酸化カルシウム(CaO)が12.27%と高目であるのは鉱石製錬滓の特徴である。

(3) 2号建物址P-7出土鉄滓(S-833)

肉眼観察： この鉄滓も人工的な破砕痕跡を残す。各面共に二次面で黒色を呈し、気泡を露出する。破面は黒褐色で気泡少なく緻密質である。

顕微鏡組織： 図版2に示す。鉱物組成は白色多角形状のマグネタイトと淡灰色長柱状結晶のフェアライトと暗黒色ガラス質スラグから構成される。

化学組成：表2に示す。二酸化チタン (TiO_2) 10.61%、バナジウム (V) 0.21%、渣滓成分30.27%からみて砂鉄製錬滓である。他の鉄滓に比べて全鉄分 (Total. Fe) が多く43.5%であった。

(4) 溝状遺構埋土出土鉄滓 (S-834)

肉眼観察：表皮は淡灰色を呈し、粗鬆で木炭痕を残す。裏面は高温で青灰色に変色したが材粘土を付着する。破面は黒褐色で微小気泡を有するが比重の大きい炉内残留滓である。

顕微鏡組織：図版2に示す。鉱物組成は淡灰色小片結晶のフェアライトと、白色樹枝状に晶出したマグネタイト、それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成されている。

化学組成：表2に示す。二酸化チタン (TiO_2) 7.81%、バナジウム (V) 0.12%、渣滓成分41.07%からなる砂鉄製錬滓である。

(5) 不明遺構埋土出土鉄滓 (S-835)

肉眼観察：黒色粘質の炉内残留滓である。裏面は青灰色変色粘土を付着する。破面は茶褐色で同緑部に気泡を発するが全般に緻密な鉄滓である。

顕微鏡組織：図版2に示す。鉱物組成は白色針状もしくは葉片状のイルミナイト (Ilmenite : $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) と白色多角形状のウルボスピネル (Ulvöspinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) の高チタン系鉱物から構成されている。

化学組成：表2に示す。二酸化チタン (TiO_2) 11.68%、バナジウム (V) 0.23%、渣滓成分40.90%の高チタン含有砂鉄製錬滓である。

(6) 2号住居址埋土出土鉄斧 (S-836)

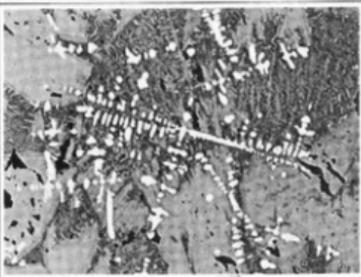
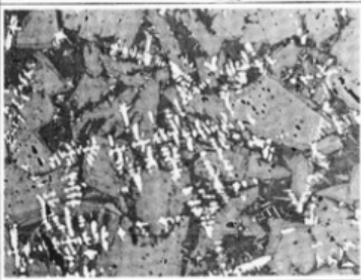
肉眼観察：長さ9cm、最大幅3.7cm、最大厚1.3cmのバチ形鉄斧である。基部の剥片を調査。

顕微鏡組織：金属鉄は酸化されてゲーサイト (Goethite : $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$) 化している。

EDAXによる非金属介在物の分析：走査型電子顕微鏡による走査X線像とEDAX (エネルギー分散型X線分析) による局部分析結果を図版3に示す。介在物組成はけい酸塩系である。介在物に白色輝点が集まるのはSi, Fe, Al, K, Na, Caであり、Tiが検出されないところから砂鉄系は否定され、鉄石系介在物と推定される。介在物の量が非常に少ない。また介在物の展伸度が軽度であることから鍛造比は低いと予測される。短冊型鉄素材を加熱して単純な鍛造加工を施したに過ぎない。鉄素材は高純度であり大陸産で、鍛冶加工は列島内で施された可能性が濃厚である。

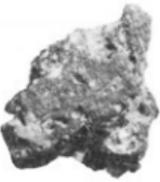
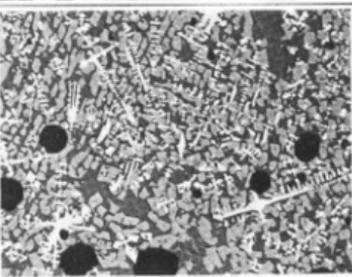
(註1) 宮本達希『姫宮遺跡発掘調査概報』II (第V次～第Ⅷ次調査) 静岡県河津町教育委員会1983年古墳時代前期から後期に比定されるピット群 (径30cm前後) から鉄滓出土。

(註2) 大澤正己「王子遺跡出土弥生中期末の鉄滓と鉈の金属学的調査」『王子遺跡』『鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書第 集』鹿兒島県教育委員会1984年。

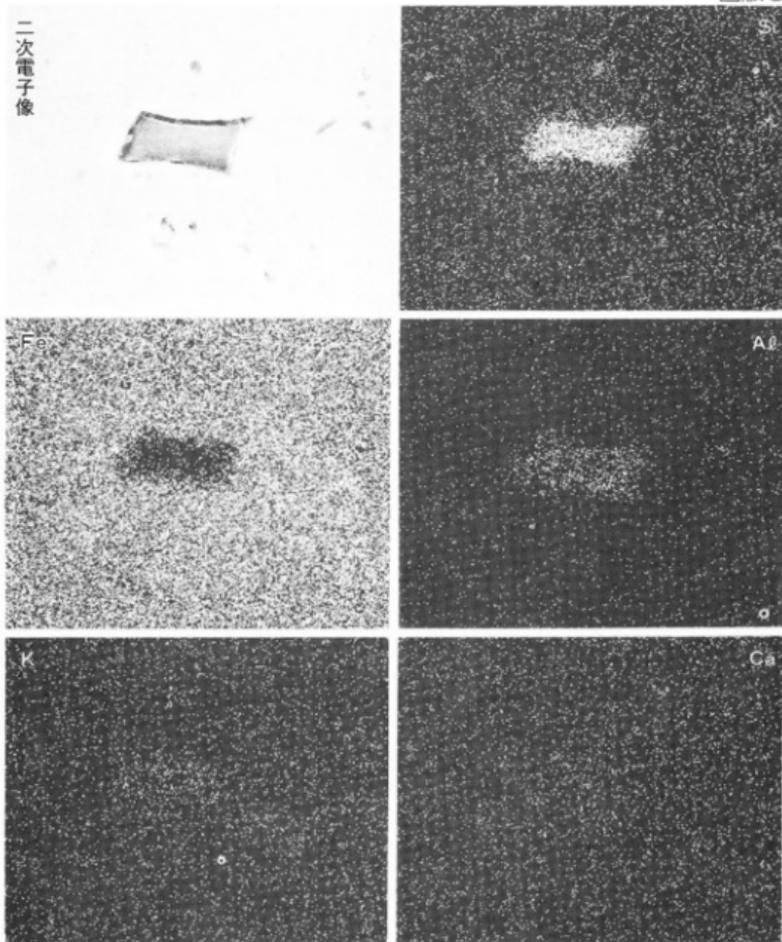
<p>S-831</p> <p>ビシャコ谷遺跡 (1号墳石室床面)</p> <p>砂鉄製鍍洋</p> <p>×100</p> <p>外観写真片</p>		
<p>同 上</p>		
<p>S-832</p> <p>ビシャコ谷遺跡 (1号墳周溝埋土)</p> <p>鉱石製鍍洋</p> <p>×100</p> <p>外観写真片</p>		
<p>同 上</p>		

ビシャコ谷遺跡出土鉄洋の顕微鏡組織(1)

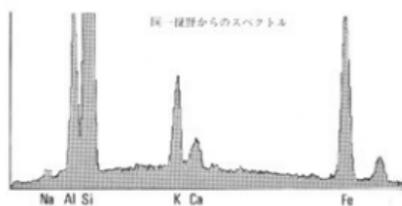
図版2

<p>S-833</p> <p>ビシャコ谷遺跡 (2号建物址P-7)</p> <p>砂鉄製錬滓</p> <p>×100</p> <p>外観写真写</p>		
<p>S-834</p> <p>ビシャコ谷遺跡 (溝状遺構埋土)</p> <p>砂鉄製錬滓</p> <p>×100</p> <p>外観写真写</p>		
<p>S-835</p> <p>ビシャコ谷遺跡 (不明遺構埋土)</p> <p>砂鉄製錬滓</p> <p>×100</p> <p>外観写真写</p>		
<p>同上</p>		

ビシャコ谷遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織(2)



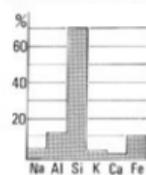
鉄屑中の非金属混在物の走査X線像(×1,500)



	WT%	At%	Ox%	%SE
Na	1.99	1.85	3.37	4.6
Al	6.72	5.33	12.70	1.0
Si	32.11	24.47	68.69	0.3
K	2.91	1.59	3.50	1.0
Ca	0.69	0.37	0.97	2.4
Fe	8.37	3.21	10.77	0.7
O	47.21	63.17		

10000

非金属混在物oxideのヒストグラム



鉄屑中の非金属混在物のエネルギー分散型X線による分析結果

ビシャコ谷遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集

昭和59年3月31日発行

発行 津山市・津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印刷 津山朝日新聞社
岡山県津山市田町13